

“ A HAPPY NEW YEAR. ”

四井浩一

これからおこる可能性のひとつを空想してみるのと同じ感触で
過去は幻想にまぎれる。
彼女のひだり目の中にわずかな傷をみつけたのは、いま一瞬の
ここではない。

煉瓦敷の舗道。北欧都市の一角。

小雪が舞っている。

イリューシャ・グランセリウス、黙って歩いている。

イリューシャ、黒いロングスカートにブーツ。

濃緑のリボンをつけた白いブラウスの上に、黒のオーバーコートを着ている。

フードを後ろにはねて、長い金色の髪を背中に流し出している。

毛糸のマフラーにあごを埋めている。

小雪が、髪につもるにまかせている。

両手をポケットに突っ込んでいる。

まっすぐ前方を見る瞳の色は、光彩に金色の斑点が散りばめられた碧いろ。

ふいに、立ち止まる。

少し前を歩いていた男が、困惑した様子で立ち往生し、首をひねって戻ってくる。

グレイのフロッグコートの肩とフェルト帽のつばに雪を積もらせたその男は、狸に似た小柄な東洋人。

男、イリューシャに気づいて、立ち止まる。

男「あのお、」

イリューシャ「はい？」

男「日本公使館はどこにあるのでしょうか」

イリューシャ「あなたは、日本人なのですか？」

男「そうですが、あなたは……、」

イリューシャ「……フィンランドの移民です」

男「ああ、……どことなく、そんな匂いがします」

イリューシャ「匂い、ですか？」

イリューシャ、唇のすぐ前にあるマフラーの毛糸に鼻を寄せてくんくんやってみる。

イリューシャ「匂いません」

男「当地は馴れましたか？」

イリューシャ、目を細めて微笑み、男を見ながら、首をふる、うなずく。

男「そうですか」

イリューシャ、落ちてゆく小雪のひとつを目でおう。

イリューシャ「つけてたんです」

男「は？」

イリューシャ 「駅から、ずっと。あなたをつけてました」

男 「なぜ？」

イリューシャ 「日本人だと思ったから……。

皇帝に戦争をふっかけた国の人間が、わたしたちと同じマトモな人間なのかどうか、ちょっと興味があって……」

男 「……」

イリューシャ 「ああ、でも、ほんとうのところ、なぜなんだろう、……ごめんなさい。

そういうことが言いたかったんじゃないんですけど……新聞で読みました。日本がロシアと開戦したことを…おなじロシア帝国の圧迫に苦しむ民族として、わたしたちは日本の勝利を願っています。この国には、たくさんのあなたの味方がいると思います」

男 「……。ありがとう。お嬢さん、お名前は？」

イリューシャ 「グランセリウス……イリューシャ・グランセリウスといいます」

男 「わたしは、明石元二郎といいます。モトジロウ・アカシです」

男、ぶっきらぼうに片手を突き出す。

イリューシャ、手袋をはずして握手する。

イリューシャ 「モト・アカシ……」

明石、うなずいて行こうとする。

イリューシャ 「あ、みち……」

明石 「あ、みちみち、そう、みち」

イリューシャ、笑う。

北欧の都邑。

(テロップ) 『 ストックホルム・スウェーデン王国 - 1904年 - 』

中世童話にあるような瀟洒な街並みに、しずしずと雪が降っている。
レンガの破風屋根。飾り窓。凍った河。橋の上を馬車がゆく。

馬車車内。

栗野、大日本帝国外交官・公使。初老。

秋月、同、書記官。若い。

のふたりが乗っている。

栗野 「明石君は、歩いてくるのかね」

秋月 「ええ、ちょっとひとまわりしてから、公使館に来るそうです」

栗野 「あいかわらずだな」

秋月 「あ、栗野公使、栗野公使、見て下さい戦車ですよ、センシャッ！」

栗野 「あれが戦車というものか」

在ストックホルム日本公使館館内。

駐在外交官・菅田が、栗野と秋月のふたりを迎える。

菅田 「ついに始まりましたな。戦争が」

秋月 「大国ロシアとの大戦争です。アジア人がはじめて行なう、欧米人との本格戦争。見せてやりましょう、大日本帝国の底力を！」

菅田、ため息をつく。

菅田 「日本は、とてもロシアのような大国と戦争をして勝てるような国じゃない。

日本は早まったことをしでかした」頭を抱える。

栗野 「戦争はもう始まったのだ。われわれは国民の半分を殺してでもロシアに勝たねばならぬ」

菅田 「せめて伊藤先生が言っていたようにロシア皇帝と同盟を取り結んでいれば……」

秋月 「よくはないです」

明石、コートの上に雪を乗せて入ってくる。

秋月 「弱小国が、ロシアと同盟を組んだところで、そのあとに待っているのは強迫外交だけだ。すこしでも皇帝の機嫌を損ねれば、一国の首都だろうと戦車で踏み込んでくる。見てください。スウェーデンも、フィンランドも、これではまるでロシアの奴隷国だ」

明石、室内でコートをバタバタやる。小雪が飛ぶ。

秋月 「こっちに来る前にポーランドを見てきましたが、あそこもひどい。許せませんよ」

明石、ストーブにケツを寄せる。ケツから湯気がたつ。

栗野、眉をひそめる。

栗野 「明石君、当地には石鹼というものがある」

明石 「は？」

栗野 「明石君。君、臭うぞ。セッケンを使うことだ。日本の外交官たるものの常に颯爽として、気品を持たねばならん」

明石、くんくんとシャツを匂う。

××××

路傍で自分のマフラーの匂いをかぐイリュウシャ

××××

明石、ニヤニヤする。

明石 「臭いませんが」

栗野 「明石君。君は語学は堪能だが、見た目がむさくるしくていかん」

明石 「セッケンでセンシャに勝てますかね」

サロン、ドロワ・ドゥ・ドメインー 4 F -

イリューシャ、ドアぐちで髪についた雪をはらう。

資料を積んだ室内のテーブルに、リュエフ。

窓辺に、ラコスキー。2人とも精悍な風貌の若者。

ラコスキー「今日、日本公使館に外交官が2人入りました」

リュエフ「公使クリノと書記官のアキヅキです」

リュエフ、資料を抜き出して示す。

リュエフ「アキヅキはまだ駆け出しですが、クリノは欧州外交のベテランです、この2人……」

イリューシャ「3人よ」

ラコスキー「え？ ……でも馬車に乗っていたのは確かに2人だけだったんですが……」

イリューシャ「ひとりとは、歩いて公使館へ行ったんです。道に迷いながらね。だから、あなたたちは見落としたのよ」

イリューシャ、ふたりに背を向ける。

ラコスキー「あ、あのっ、わ、われわれは……」

イリューシャ、オーバーコートを脱ぐ。

衣装箆笥にコートを入れ、鏡をみながら、袖にゆとりのあるドレスシャツの着くずれを直し、リボンを整える。

イリューシャ「見落とし」

リュエフとラコスキー、緊張し蒼白になる。

イリューシャ「……。ささいな、見落としよ。ここは、露都ペテルブルグじゃないし、わたしは、あなたがたにいちいち震え上がるクセをつけた前の上官とは違う人間なのです。ドモリながら、弁解する暇があったら、わたしに熱いアールグレイを入れていただけませんか？ そしたら、許したげる」

リュエフ、眉を片方だけあげる。

ラコスキー、どうてい信じていない。

リュエフ「3人目、というのは？」

イリューシャ「モト・アカシと名乗ったわ」

リュエフ「接触したんですか？」

イリューシャ「ええ。握手してきた」

ラコスキー「まさか」笑う。

イリューシャ「リュエフ、すぐ調べて下さい」

リュエフ、資料をくる。

イリューシャ 「ラコスキー？」

ラコスキー 「アール？」

イリューシャ 「グレイ」

リュエフ 「ありました。明石元二郎。大日本帝国陸軍大佐。駐在武官。開戦一年前までペテルブルグにあった在露日本大使館に 過去2年在任しています……露都ペテルブルグ……」

ラコスキー 「ロシア通」

イリューシャ 「大佐。駐在武官」

ラコスキー 「ここスウェーデンには、ロシア帝国の統治に反逆する地下組織が集中しています」

リュエフ 「スパイ工作にはもってこいだが」

ラコスキー 「この男？」

イリューシャ、ティカップを受け取る。

リュエフ、明石元二郎の資料の上に赤インクで大きく<モト・アカシ>と書き出し、丸で囲う。

ラコスキー 「高等警察は、どうですかね」

イリューシャ、ティカップを両手で抱く。

イリューシャ 「知らないわ」

在ストックホルム日本公使館。

明石と秋月。ストーブを挟んで座っている。

明石、靴を履いた足をもぞもぞさせている。

秋月「ロシアの高等警察。スウェーデンは、建前上独立国ですが、ストックホルムを警備しているのは、ロシアの高等警察だ。この国が、事実上、ロシアの隷属的支配下にある証拠でしょう」

明石「不思議なもんだな。本国は戦争をしているのに、俺らは、その戦争相手国の衛星国にいて、ご丁寧に敵国のポリスに警護されている」

秋月「連中が我々を警護してくれるなんて本気で言ってるんですか？」

明石「戦時とはいえ国際法があるだろう」

明石、濡れた靴を脱ぐ。

秋月「呑気だな。気をつけてください。奴らの凶暴さは、日本の憲兵隊以上です」

明石「ロシアの高等警察か……。署長の名前はなんというんだ？」

秋月「たしか、トルージン」

明石、靴下も脱ぐ。

明石「高等警察……取る仁丹……」

明石（……いりゅーしゃ・ぐらんせりうす）

秋月「トルージン」

明石、靴をストーブの上に乗っける。

明石（イリ्यूシャ・グランセリウス……あの娘の名前は、長くても IPPATZ で憶えられたのにな）

明石「高等警察……とるじん」

王宮。

玉座に王。

王を中心に両翼に並び立つ執政大臣、宮廷側近、近衛の兵隊。

そのたたずまい中世ファンタジーそのまま。

ロシア高等警察署長トルージン、部下のザーノフを連れて拝謁の間中央に直立している。

トルージン 「スウェーデン国王陛下にあらましましてはご機嫌麗しく、ご拝謁をお許しいただき、このトルージン、身に余る光栄でございます」

王 「ここへ来る前に西の小竜宮を訪れたそうじゃの」

トルージン 「はい。まことに素晴らしい宮殿でございました」

王妃 「あれは、王女の誕生祝いに造らせた離宮での。技の巧妙もさることながら、民の負担も考え、仕上げるのに16年の歳月をかけた。王国一の華麗な建築様式を持つ宮殿じゃ。もはや、あれをしのぐものは造れまい。姫にはおおいおい婿を迎えて、ながくしずかに住ませたい」

王 「して、トルージン。かく参った用件を申せ」

トルージン 「王府の河橋はまこと華麗ながら、皇帝の戦車を巡らせるにはいささか狭小。西の小竜宮をば粉碎し、その石材を用いて補強いたしたく、本日はお願いに上がったしだい。よろしいな、国王陛下？」

王妃 「なんと申された？」

トルージン、懐中時計を繰り出して覗く。

トルージン 「なに、人手はいりませぬ。わが3インチ砲をもってすれば、一撃で宮殿の分解はかないます。1分とかかりません。そろそろ……」

西の遠方で、連続砲撃音が聞こえる

王、拳を握って震え、王妃、蒼白になる。

トルージン 「ご機嫌を損じたのでしたらこのトルージン、大ロシア帝国の皇帝陛下より当地に派遣された一介の警察署長にすぎぬ身なれば、スウェーデン王の金の靴の下に跪き、かく許しを乞いたいとぞんじあげますが、な、さて、いかに？」

トルージン、別段ひざまづくそぶりも見せない。

王宮側近 「愚弄っ、許せぬ！」

王宮衛兵団、腰の剣に一斉に抜く。

ザーノフ、腰のピストルに手をかける。

トルージン、ザーノフの腕を軽く押さえる。

トルージン 「暗黒の中世は終わったのです。陛下」

遠く、砲撃音が止む。石の破碎音。

トルージン「さて、わたくしは王府の巡回業務がございますので、これにて失礼を」

トルージン、一礼し、ザーノフを連れて退場する。
王妃、震える。

王「……。異民族滅ぶべし」

宮廷回廊。

ザーノフ 「美しい城ですな」

トルージン、王宮の塔と城壁を振り返る。

トルージン 「これは要塞ではない。即刻、コンクリートで塗り固めさせろ」

在ストックホルム日本公使館。

明石と菅田。

菅田、窓辺に立っている。横顔が、憔悴しきっている。

明石、靴を乗せたストーブに足を向けている。

明石「こちらは長いのですか？」

菅田「ええ、文明、というものをさんざん見ましたよ」

明石、素足の指を曲げたり伸ばしたりしている。

明石「畑を耕し漁をする我々とは、ずいぶんちがいますね。産業革命。これは地球を変えてしまった。起こった以上は乗らなければならない。乗り遅れたものが奴隷にされる」

菅田「明石さん。あなたは、ロシア本国に駐在したこともある武官だ。露都ペテルブルグの日本大使館が引き引き揚げになった時、どうして帰国しなかったのです？ いま帰らなかったら…次はないかもしれない」

明石「日本がなくなっているかも？」

菅田、ぼんやり窓の外の凍った光景を見詰める。

菅田「ご存知でしょう。ロシアの占領政策の容赦のなさを。負ければ人の棲む国とは扱われない。自主憲法は取り上げられ、国会議事堂は高等警察の本部にでもなるでしょう。虎ノ門あたりは政治犯を収容する監獄街になる。そこでは連日、銃殺刑が執行されるでしょう。東大寺も日光東照宮も潰され、代わりにロシア正教の、巨大なタマネギ頭をした大聖堂が建つ。対馬は要塞島になる。横須賀はロシア太平洋艦隊の基地に。日本人は、日本人であることを禁止され……」

明石「……妻はロシア語でおかえりというのだろうか……」

菅田「ああ、そういえば」

菅田、執務機の抽斗をあけ、外交官郵袋の中から手紙を取り出して明石に渡す。

菅田「あなたに個人郵便が届いてましたよ。奥様ですか」

明石「ちがうようです」手紙をポケットに突っ込む。

菅田「日本はそろそろ梅、ですか」

明石、ポケットから手紙を取り出して封を切る。

明石、菅田、なんとなく鼻から空気を吸う。

明石「末の弟ですよ。金沢で会社勤めを」文面を見ている「……徴集がきて、兵役につくようだ」

明石「第九師団。に決まったようです。苦勞の九ですかね」

菅田 「楽曲でいえば、第九、はめでたい響きじゃないですか。武運あれかしです」

明石、窓の外の凍った風景をなんとなく見る。

サロン、ドロワ・ドゥ・ドメインー 4 F -

イリューシャ、窓から向いの凍った河を眺めている。

ラコスキー 「露日戦争勃発と同時に、ロシア衛星国であるこの国に送り込まれてきた以上、その3人は、対露工作を命じられていると考えていいでしょう」

リュエフ 「高等警察のトルージンも、そう見ている。日本公使館周辺の巡回警邏スケジュールが今朝から倍になった。」

イリューシャ 「クリノ、アキヅキ、アカシ……。高等警察は誰を一番に警戒するかしら？」

リュエフ 「経歴の厚さから言って、公使クリノでしょう。私がトルージンならクリノを徹底マークしますね」

ラコスキー 「しかし高等警察といっても所詮は公式機関だ。実質的な捜査や逮捕活動は、われわれの眼からみるときわめて、鈍い。手ぬるい。このストックホルムには、フィンランド過激反抗党の残党が多数逃げ込んでいるが、高等警察は、いまだにその首謀者の名前ひとつ突き止められずにいる」

リュエフ 「俺たちの獵場は、ペテルブルグの大宮廷なんですがね」 イリューシャを見る

イリューシャ、答えない。凍った河を見つめて考え込んでいる。

ラコスキー 「われわれ3人だけじゃ日本の公使全員は追跡しきれませんよ」

イリューシャ、振り返る。

イリューシャ 「いい？ わたしたちは、アカシひとりを標的とするのよ」

リュエフ 「アカシ？ なぜ、彼が最も危険だと？」

イリューシャ、肩をすぼめる。

イリューシャ 「匂い、です」

ラコスキー 「……臭い、ですか」

陸軍省館内、高等警察本部。

アンティークな食卓の上に、世界地図がひろげられ、トルージン、ザーノフが卓についている。給仕が、地図の上に、次々と料理を並べてゆく。トルージン、ナイフで切り分けた肉を手掴む。

トルージン 「皇帝の領土は世界最大だ。まず、西をみよ。列強ひしめき合う、ヨーロッパにあって、バルト諸国は言うにおよばずポーランドをも跪かせ、北欧フィンランド、そしてこのスウェーデンにも、皇帝の威光はとどいておる」

ザーノフ 「国境を接するはドイツ帝国、オーストリアハンガリー帝国、オスマン、ペルシヤ、アフガニスタン、……そして、かのモンゴル。ユーラシア大陸に冠たるまさに史上最大の帝国ですな」

トルージン、しゃぶりつくした骨で地図上を示す。

トルージン 「そして、東をみよ。シベリアの彼方、地図の端に、コレこの通り、ちんけな帝国が描いてある。野猿の棲む島だ。＜日本＞という。領土を献上せよと命じたところ、あろうことか、この島の猿どもは、イヤだとヌカした。そればかりか、身の程知らずにも皇帝に対し宣戦布告をし、大陸満州に戦端を開きおったのだ」

ザーノフ、ナイフで料理を細分し、細分された食材を手で掴む。

ザーノフ 「猿どもは、皇帝の威光に恐れをなし、集団発狂したのでしょうか」

トルージン 「うむ。猿どもにまともな思考力など、期待する方が間違いだ」

ザーノフ 「聞くとところによると、頭のてっぺんを剃り、奇妙に髪をくくるそうな」

トルージン 「まさに辺境の野蛮人だ。文明をしらん。征服してやることで、野蛮人にも文明の光明を授ける。蒙昧な呪詛医療を改めさせ、美しい都市のデザインのありかたを教え、ルールを諭し、獣をして人間なさしめる」

トルージン、骨を床に捨て、靴でテーブル下に蹴り捨てる。

ザーノフ 「なんと皇帝陛下の慈悲深きこと」

ザーノフ、掴んだ肉を喰らう。至福の咀嚼。

在ストックホルム日本公使館。

栗野、菅田、明石、秋月、がフォークとナイフで夕食をとっている。
食材は貧困だが、明石を除き、他の者は、それぞれの理由で、マナーはいい。
滑稽なほど、過剰に良い。

菅田「そして今、ロシア皇帝の欲望は極東の小さな日本に向いています。
皇帝の欲するものは太平洋に面した軍港なのです。」

秋月「渡しません」フルーツを曲芸なみの器用さで分解する。

秋月「帝国陸軍が、満州でロシア軍の進軍を阻止します。迎撃し追い返す」

菅田、気弱気に、明石の方を見る。

明石「ロシア軍の動員兵力は日本の十倍以上だ。満州に展開した日本軍は、
踏みつぶされる」

秋月、鼻で笑う。

秋月「それが、帝国陸軍明石大佐の見分ですか？」

明石、頷く。

秋月「日本人には、大和魂があります。露助が何人束になろうと、気迫横
溢したひとりの日本兵にはかなわない」

明石「文官がそんな馬鹿なことを口走ってもらっちゃ困るんだが」

秋月「大陸清国をさえ軽々とやっつけた帝国陸海軍ではないですか。明治
開闢以来、列強毛唐どもの不当な態度に、国民の堪忍袋の緒は限界にきてる
んです。世界を我が物と考え欲しいままに奪う列強の傲慢さ、これに鉄槌を
下すは、神州日本の使命です。国民は大いに発揚しています。大佐、国民の
オーダーですよ。帝国陸海軍は、国民の期待に応じて当然でしょう」

明石「無理なもんは無理なんだ」

秋月、ため息をつく。

秋月「なにを根拠に。明石さん、新聞読んでますか？ ロイターは日本軍
の優勢を報じてますよ。世界がそう言ってます」口を拭いたナプキンを膝に
捨てる。

明石、首をひねる。

明石「なぜ、だろう？」心底わからなさ気。

秋月「皇国の兵は、みな潔く戦って死ぬ覚悟だ。なによりこれが強い」

明石「潔く、か」

栗野「明石君。靴が焦げている。あれは君のだろう？」

栗野、ストーブの上で湯気をあげている靴を指差す。

秋月、鼻を押さえる。

明石、手近にある布で手を拭き、のそのそ立ち上がって、ストーブに近づき、靴を取る。

秋月「明石さん。年上のあなたにこんなこと言いたくはないのですが、あなたは言うことやること、ちょっと常識に欠けてやしませんか？」明石「ほう、常識？」

秋月「天皇陛下に命を捧げることは日本人としてごく当り前の常識です。あなたも一人前の大人なら、そのあたりのことをきっちりわきまえるべきだ」

明石「そうだね」靴の乾き具合を確かめている。

秋月「軍務研究もよいですが、もうすこし、世間を見られてはどうですか。どうも、あなたはズレていてやりづらい」

陸軍省館内、高等警察本部。

早朝。

トルージンとザーノフ、中庭に列なした警官たちを見下ろす。

トルージン「皇帝陛下の慈悲深きこと。しかし、猿にはそのありがたさがわからない。猿ゆえ戦力の相違が数えられず、いたずらに手向かいおるのだ」

ザーノフ「困った猿どもですな」

トルージン「猿などはよい。だが、猿の狂騒に興じて踊る愚かな人間が、このヨーロッパにも現れる」

ザーノフ「人間には理性があります。猿と一緒にされては……」

トルージン「踏み潰したフィンランド。その反抗残党が、このストックホルムの地下に潜んでおるとの情報もある。人間とはいえ、いわゆる、狂信者、どもだな。こういった狂人どもが、猿の狂騒を猿真似んとも限らん」

ザーノフ「わがロシア高等警察の任務は、その狂人どもをいぶりだし全員の息の根を止めることにあるわけですな」

ザーノフ、心なしか窓に寄り、トルージンの視線から中庭を塞いでいる。

トルージン、押しのけて、警官の列を見下ろす。列に穴が目立つ。

トルージン「なぜこうも怠惰な連中なのだ」

ザーノフ「しかし、本国の選りすぐりです。高等警察には平民などは一人もおらず……」

トルージン「狂信者どもと猿を結び付けねばそれでよい！ 数の少ない猿をよく観察しろ」

トルージン、日本公使館職員の名簿と職歴書をみる。

トルージン「とくに、老いた猿。素面な人間をさらに選りすぐって、こいつをがっちり監視させておけ」

トルージン、公使栗野の書類をザーノフにつき渡す。

在ストックホルム日本公使館。

執務机に公使栗野。隅のソファーに菅田。窓辺に秋月。

明石、靴を両手に持って、部屋の中央で、子供のように突っ立っている。

栗野「靴も、もう乾いただろう」

明石、靴に足をねじ込む。

明石「ええ、そのようです。そこいらのホテルで本営の指令を待つことにします。お世話になりました。」

明石、ドアノ前で敬礼し、退出する。

秋月「平時に、軍人が研究交流のために、外国駐在するのはわかりますが、すでに開戦したんです。明石大佐、本国に戻って戦場に行くべき人でしょう？」

栗野「彼に呼び戻しの指令はきていない。おそらく来ないだろう」

秋月、せせら笑う。

菅田、肩を落す。

栗野、明石が出て行ったドアを見ている。

セイゲルホテル、その一室。

気楽に姿勢で立つ、リュエフ、ラコスキー。

トルージン、半裸でベッドの上。娼婦が二人同衾。

リュエフ「このように、われわれにはいつでもあなたを殺すことができる」

トルージン「わわ、私はロシア高等警察署長であるぞっ！ ストックホルムでわたしの名を聞いて震えあがらぬ者はないっ！ あのトルージンであるぞっ！ 人違いするなっ！」

リュエフ「合ってますよ。そのトルージンに言っている」

ラコスキー、娼婦を追い払う。

トルージン「貴様ら、何者だっ！」

ラコスキー「同じロシア人には違いない」

リュエフ「ペテルブルグ宮廷監査部です」

トルージン「宮廷監査部？ ……なんだそれは」

リュエフ「皇帝陛下直属の部門で我々の存在は公にされていませんからね。公式機関であるところの高等警察の署長が知らないのは当然です。本来なら、我々もあなたに接触すべきではないのです」

トルージン「どこの何者か知らんが、このストックホルムは、私の管轄下にある。貴様ら、高等警察の威光を……」

リュエフ「我々は『ロシアの霧』の指揮下にあります」

トルージン「……馬鹿な」

リュエフ「監査部の名前は聞いたことがなくとも、『ロシアの霧』の神話なら聞いたことがおありでしょう？」

トルージン「……『ロシアの霧』など実在せん。あんなものは宮廷貴族のうわさの上でっち上げられた幻だ……もし……もし万が一実在したとしても、ソイツはペテルブルグ宮廷内部に出没する者だろう。ここは外国だぞ」

ラコスキー「戯曲調に言ってやれよ。でないとコイツのアタマじゃ理解できんよ」

リュエフ「皇帝にとって好まざる人物は排除すべし。私達の目的は一致するでしょう？」

トルージン「協力しよう？」

ラコスキー「ばっか」

リュエフ「協力？ いい言葉ですね。そうしなさい。お持ちの情報のすべてを我々に提出し、時と場合を選ばず、我々の出動命令に応じていただきます」

トルージン「私にどういう利点があるのだっ！」

ラコスキー「部下の能力査定の手伝いくらいならできるぜ。護衛を増やしな。協力を怠れば、いつでもどこでも我々は現れる」

リュエフ 「明後日、ご自宅にお伺いします。それまでに資料をそろえておいて下さい」

ラコスキー 「んじゃ、あばよ」

その廊下。

高等警察、署長護衛の警官が6人、ばらけて倒れている。

リュエフとラコスキー、それらを踏みつけながら悠々と去って行く。

ホテル・ニーヴァ、フロント。

入ってきた秋月、フロントの老婆に会釈し、カウンターにある宿帳を取る。
ぱらぱらめくる。

新しいページに、宿泊者記帳がある。

「国籍・大日本帝国 姓名・明石元二郎」

秋月、真っ青になる。

カウンターの老婆、ニコニコしている。

老婆 「その人なら2階の部屋にいるよ」

秋月 「そんな馬鹿な」

ホテル・ニーヴァ、明石の部屋。

明石、床にコートを広げて、その裏生地には字を書き込んでいる。

秋月、飛んで上がってくる。

秋月「あなた気は確かですか！ あなたは、帝国陸軍の軍人だ。駐在武官といえど、それにちがいない。この街では偽名ぐらい使わないと、……高等警察に密かに殺されたらどうするんですか！」明石「君は、親切だね。まっすぐだ」

秋月、苦々しい顔で、ドアを叩き閉める。

秋月「出て行かれた以上、日本公使館は、あなたの面倒はみませんから。私だって好きで来たわけじゃない。なに書いてるんです？」

明石「だからさ。こんな異国で、名無しのゴンベイのまま死体になって捨てられちゃ拾った人が迷惑するだろうから。身柄がわかるように名前を書いてる。これなら、公使館も遺骸を拾いにこないわけにいくまい」

秋月「きっぱり飛び出してきたわりには情けない。潔さってものがないんですか、あなた」

明石「オレあ、西郷どんにも、坂本竜馬にもなれんよ」

秋月「坂本リョーマ？ てだれです？」

明石「知らんか。明治政府も、しょせん薩長の寄り合いにすぎんてことさ」

秋月、覗き込む。

明石、コートの裏地に名前を書き込んでいる。

英語、ロシア語、ドイツ語、フランス語、その他秋月にもわからない文字が並んでいる。

秋月「案外、器用なんですね」

明石「世間も見回さず、閉じこもってひとつことに熱中していれば、これくらいのことは君にだって、できるようになるよ」

秋月「それは前わたしが言ったことへの斬り返しですか？ えらく遅いな。ずいぶん執念深くてどうにも暗い」けらけら笑う。

明石「ところでなにしにきた？」

秋月「宇都宮さん、ご存知ですか？」

明石「在露大使館で一緒だった。オシャレな外交旦那だ。いまロンドンだろ？」

秋月「こっちに来られてますよ。あなたに会いたがっておられたので、渋々ご報告」

明石、笑う。

明石「やはり、存外律儀ない若者じゃないか、君は」

秋月 「あなたと違って常識がありますから。協調和合は日本人の美徳です」

秋月、愛想よくにっこり笑ってから、不愉快な顔つきで明石を睨みつける。

河沿いのカフェ。

明石、ずるずるに着崩れた洋装。

宇都宮、ぴったりに仕立てられた洋装。立派な英国紳士ぶり。

ふたり、路上端のテーブルに座っている。

宇都宮「やあ、あいかわらずいい狸顔だ。ほっとする顔だな」

明石「ほっといてください」

宇都宮「干されて拗ねてるそうじゃないか」

明石「本営のエライ人には好まれてませんもので……。拗ねちゃいないですよ」

宇都宮「エライひと……児玉サンか」

明石「軍隊じゃ見栄えのいい乃木サンみたいなのが可愛がられるんです。どうせ、ぼくみたいな狸面じゃ、率いられる兵士も死にきれんでしょうよ」

宇都宮、笑う。

明石、むっとする。

明石「外務省のエライさんが、ぼくなんかになんのお話があるんですか？」

宇都宮「ロンドンは、世界の情報が集まる。あそこにいれば、クニにいる君の嫁はんが、いつ誰と寝たのかも、すぐにわかるぞ」

明石「知りたくないですね。戦局はどうです？」

宇都宮「勝ち目ナシだな。日本はもう兵隊もカネもカラッケツだが、ロシアは左うちわだ。シベリア鉄道が完成したら今の3倍の兵力がピストン輸送されるようになるだろう」

明石「新聞が言ってることと違いますね。フランスでは、日本が快進撃してるって聞きましたよ。この戦争はこのまま日本が勝つって」

宇都宮「ロシア軍の意図的後退だ。満州にいる日本軍の補給路をしたたか延長させて、一気に包囲逆襲してくる。奉天が危ない。ロシア軍が反撃に出た時が日本軍の全滅するときだ」

明石「ちくしょう思った通りだ。帝国陸軍は猪突猛進で脇が甘い。見てくれ華々しいから、ヨーロッパの記者連中には、日本の快進撃に見えるんでしょうね」

宇都宮「その観測は丙だな。君は、報道でものがわかってない」

明石「なんですか、記者連中がおもしろがって快進撃報道にしてる、とでも？」

宇都宮「記者じゃない。日英同盟のなせる技さ。世界各地の情報は一度ロンドンにかき集められ、ロンドンから世界へ回覧される」

明石「それがなにか？」

宇都宮「日本は自力で戦争ができるほど金持ちじゃない。列強からカネを借りて戦争をしている。負けそうな国には、だれもカネを貸しちゃくれん。

カネがなければ、砲弾も作れず戦えん」

明石 「そういうことを国民が知らないじゃないですか。日本の新聞も新聞だ。外国報道を真に受けて、どうどう自力でロシアをやっつけられるかのようなことを書くから、国民だって勘違いする。火の車になってる帳簿公開して、丸々借金だって言えばいい。日本は外国と戦争できるほど金持ちの国じゃないって」

宇都宮 「だから、君はそこがわかってない。そんな内情を知って喜ぶのは、ロシア軍だ。日本の困窮を知れば、さらに嵩にかかって日本に踏み込んでくる」

明石 「敵に隠し事をするために、自国民にも目隠しをしてしまうんですか。それで戦争遂行は国民の総意だなんて、よく言える。いつかろくなことにならなくなりますよ」

宇都宮 「地球は極楽浄土じゃないんだよ。他にどうすべきか策があるなら言ってみたまえ」

明石、即座の返答に困る。

宇都宮 「まあ、聞け。ロイター通信は、弱小可憐な日本に同情的だ。連中にとっちゃ、これは童話の中の戦争なんだ。ヨーロッパ最強帝国の悪の皇帝が、農民と漁民しかいない小さな小さな平和な島を略奪しようとしている。しかして勇敢にも皇帝の大軍に立ち向かう善玉日本人。勇者ここにあり」

明石、鼻で笑う。

明石 「ヨーロッパの諸国家は、もともとロシアの侵略本能に危機感を持っているのです。いいように代用されているだけだ。なにが勇者だ」

宇都宮 「ち、い、さ、な、勇者だ。こういう言葉が大事なんだよ。諸国の同情を引かなければ日本は侵略から身を護れん」

明石、頭を抱える。

明石 「日本の大本営は……」

宇都宮 「他国に侵略されるくらいなら、国民がひとりのこらず死に絶えるまで、戦うことを命じるだろうぜ」

▽

宇都宮 「私は夕方の船便でロンドンに戻る」

宇都宮、懐中時計を見る。

「ところで、君いまいくら持ってる？」

明石 「カネ？ ここの支払いなら持ちますよ」

宇都宮 「そんなハシタガネじゃない。国が買えるくらいのカネ」

明石 「大金なら、栗野公使が、百万円持ってますね」

宇都宮 「すごい。百万とは破格値だな。」

明石 「公使館の運用資金です。外交機密費でやつ」

宇都宮 「栗野は、それをどう使うつもりなんだ？」

明石 「和平工作でしょう。……ペテルブルグの宮廷貴族にばらまいて、皇帝に日本との和平説得をさせようとしています」

宇都宮 「それはダメだ。それは開戦前に伊藤博文もやろうとしたが失敗してる。もっとも、それで良かったんだが、……ロシアは公約を守る国じゃない。あんな国と不可侵同盟条約なんか結んだヒにゃあ、いいようにテゴメにされて捨てられるだけだ。スウェーデンがいい例じゃないか。日本はイギリスと組めたのが最大の幸運だったんだ。これを使わないテはない」

明石 「ははあ、東欧の栗野公使に百万円が落ちて、ロンドンのあなたには落ちなかったあたりで、拗ねてんですね」

宇都宮 「私は、干されてはないぞ。地球の裏側で、日本のために忙しく働いているよ。言ってるだろう。ロンドンには世界中の情報があつまり、そこから……」

明石 「カネとか報道とかなんかじゃ戦争には勝てません。それもガセ報道なんて。戦争は実弾でするものです」

宇都宮 「君、栗野さんの百万円、掠めとれんか？」

明石 「なに言ってんですか？」

宇都宮 「カネと報道で戦争に勝つ」立ち上がる

宇都宮 「東欧は君に任せる」

明石 「任せる？ なにを？ ぼくは陸軍大佐です。文官の横槍をなあなあと聞いてちゃ軍規が崩壊します」

宇都宮 「……。児玉サンには、プランパワーがあるよ。君を呼び戻さないのは考えあつてのことだと思う。私には、なんとなくわかる」

明石 「だから。同郷だからってつるまれては困ります。大将も大将だ。軍政と国政をごっちゃにするような、ああいう・・」

宇都宮、聞いていない、欧米人のように背中を向けたまま手を振ってちゃきちゃき店をでてゆく。

明石 「……なにができるってんだ、今の俺に」

路上

明石、ぼつぼつ歩く。
なにか思い出して、立ち止まる。
襟の臭いをかぐ。
ふりかえる。

×××

振り返ったところにいたイリューシャ。

イリューシャ 「つけてたんです」

×××

明石 「……なぜ？」

×××

イリューシャ 「この国には」

イリューシャ 「たくさんの」

イリューシャ 「味方」

×××

明石、歩き出す。

在ストックホルム日本公使館、廊下。

明石、扉を開けてずかずか乗り込んでくる。

秋月「おや、めずらしい。ここはキライじゃなかったんですか？」

明石「決めた。戦争だ。天皇万歳。七生報国。やると決めたら断固やろう。
この戦争、大日本帝国に勝っていただく」

秋月（言うコトもめちゃくちゃだし……）

在ストックホルム日本公使館・栗野執務室。

栗野、執務机の座って瞑目している。

ノックの音。

明石 「明石です。入ります」

明石、入ってくる。

栗野 「なんだ。まだ、このストックホルムにいたのかね？」

明石 （こんの爺いまでなんだ！）

明石 「用事がありますからね。ついては、無心したいことがあって来ました」

栗野 「なにかね」

明石 「ぼくに百万円下さい」

栗野、座りなおす。

栗野 「君はなにかね。白昼堂々この日本公使館へ押し込み強盗を働きにきたのかね」

明石 「だから、ちゃんと顔をあわせて、下さいっ、と言ってお願いしています」

栗野 「百万という金額が、今の日本にとってどれほどの大金か、君わかっているのか？」

明石 「女工が生糸を紡いで稼いだ大事な外貨です。我々にはどうてい稼ぎ出せない大金ですね」

栗野 「国家を賄う大事な資金だ。それをどうする気だ」

明石 「この国の貧民にバラまきたいんです。みんな生活に困って窮しています」

栗野、あんぐり口を開ける。

栗野 「君は、なにを言ってるんだ？ この国の女にでも泣かれたか？ ……君まさか、森先生の」

明石 「そんな理由で、百万円も貢ぐバカいませんよ。森センセだって結果オンナから逃げた」

栗野 「では、なにに使おうというんだ！」

明石 「栗野公使の考えておられるような使い方じゃダメです」

栗野 「批判を聞いてるんじゃない。きみの用途を聞いている」

明石 「言えません」

栗野 「まるでスジが通っとらんじゃないか」

明石 「言ってもいいが、聞いたが最後、栗野公使、あなたの生命は保証しかねますよ」

栗野 「なにをコシヤクな」

明石 「チョウホウに使います。ジョウホウセンソウに使います。そのテレ
ンテクダを聞いたが最後、あなたも一味になる。コトが発覚すれば、スパイ
のカタワレとして戦犯裁判にかけられるコトになる」

路上

イリューシャ、黒いコートに包まって、そこから白い手を伸ばしている。
指先で、ノラネコと戯れている。

イリューシャ 「……」

在ストックホルム日本公使館・栗野執務室。

栗野 「オンシャこのわしを脅すとか？」

明石 「脅す方も、すでに脅かされてるんです！」

栗野 「だれに？」

明石 「そ、それは……それは……」

明石、躊躇する。

栗野 「きみは一体、ダレに脅されているというのかね」

明石 「……それは……自分、にですよ」

栗野 「はあ？」

明石 「衝動にですよっ！ このまま負けられないんですよっ！ 公使っ！
ドブに捨てたと思って、ぼくに百万円下さいっ！」

栗野 「……。呆れたわ。まったく、呆れたぞ、明石君」

明石 「お願いします！」

栗野 「君は諜報をなそうとしている。もっとも繊細さを要求される仕事だ。
論理だって要る。君のはムチャクチャではないか」

明石 「……ダメ、ですか」

栗野 「ダメ、だな。まったく話にならん」

明石 「……」

在ストックホルム日本公使館、表の道。

明石、ポツンと出て来る。

ぼろぼろ泣き始める。コートですそで顔面をゴシゴシやり、
たらした鼻水をそでにべっとくっつけて、とぼとぼ歩いてゆく。
ノラネコだけが意味もなくついてくる。

ホテル・ニーヴァ、明石の部屋。

秋月、上がってくる。挨拶もせず、隅のソファに座り込む。うなだれる。

秋月「本営が出し渋っていた戦況報告書をみたんですけどね。ロイターの報道ととんでもない食い違いがある」

明石「不思議な話だよ。戦争やってる当事国の外交官ですら、外国の報道通信を元に世界を見てるなんざ」

秋月「日本は負ける……滅びるんだ……」

明石「うん、そういつてるじゃないか」

秋月「あれ？　ところで、明石さん、なにしてるンです？」

明石「ヒモを選んでいる」

秋月「首でもくくるンですか？」

明石「うん。郷里の実家は土豪侍の出だったが、爺イはぼくに腹の切り方を教えてくれる前に他界してしまったからねえ。しかたがナイから丈夫な縄で一息にギャツと」

秋月「ああ」

明石「秋月君。皇国が滅ぶ時が国民の死すべき時なのだろう。それが一人前の大人のすることだ。ぼくには皇国の滅びが完璧に見えたから、いま死ぬよ。栗野公使も、追って死んでくれるよ。常識あるニッポンの外務省公使だから」

秋月「執念深いな」笑う「どうして急にそんな」

明石「世間に負けた。君もそうなさい、この縄なんか結構いけそうだよ」

秋月「いや、あなたは勝ってますよ」

明石「もういいよ、ほっといてくれ」

秋月「栗野公使から、いくらかカネもらってきたんですけどね」

明石「国へ帰るカネ位自分でなんとかできるよ」

秋月「フランス紙幣で50万円分。出しましたよ。常識人が」

明石「やっぱり、世の中、どうかしている」

秋月「信じないんだなあ」

秋月、紙幣束をテーブルの上に積む。

明石「……」

秋月「日本はもうダメだ。この金掴んで、南方へでも逃げませんか？　南の島で皇帝になれますよ」

明石「領収書いるのかなあ」

秋月、吹き出す。

秋月「外交機密費だ。スパイ活動でバラまく金に領収書が要るワケないでしょう？　おかしなところで律儀な人だ」

秋月、笑い出す。

秋月「いや、もうそんな話いいですよ。逃げましょうって」笑いおさまらない。

明石「なぜ50万？」

秋月「あなた百万はふっかけただけでしょう？ 本当に必要だってのは、これくらいだったはずだ。恩に着せるようにして50万もかすめ取るなんて、あなた立派な詐欺師だ」

明石「しよせんは官僚だ。公使にだってマトモな金銭感覚はナイだろうよ。血税だぜ。しかし、どうして出したんだろう」

秋月「栗野公使？ あなたは、上役、常識人、てのを見誤ってますよ。維新前の一件で新政府になってからも、しばらく謹慎くらって、出世こそ遅れてますが、栗野公使は……」

明石「維新前の一件、てなんだい」

秋月「幕末の頃です。路上でガイジンを斬った。たまたま居合わせただけといわれていますが。栗野公使は、私たちと違って藩士だった人だ。鬘を結ってカタナを差してた。いまは洋装していますが、中身は行儀がいいだけの外交官じゃない」

明石「あいつら世代がいつまでもサムライ気分なのが困るんだ。癒着のカタマリだ」

秋月「そう、大本営にも縁故知人は多い、ですな。で、あなたのこと問い合わせたそうですよ。そしたら陸軍の大将が」

明石「児玉サンが？」

秋月「明石大佐にヤラセロ、と」

明石「野朗いまさら何いいやがる」

秋月「指令書は追って送るそうですよ。そそっかしい大将ですな」

明石「軍総参謀長のくせに軍の中で大人しくしてるってことができない。おまえら外務省と連絡とって外国工作にまで口出ししちまや、そりゃ国政への介入じゃないか。なぜ、おまえら怒らない」

秋月「明治日本を愚弄してますな。で、どうするんです？ 明石さん」

明石「ロシアの圧制を憎む人間なら、この国に腐るほどいるぜ！」

秋月「ああ、地下組織か。しかし、明石さん……そいつらにロシアへの反逆意思があるからって、我々日本人の味方とは限らない。欧州人には違いない。しかも反逆者。テロリストだ。凶暴さは高等警察の上に行くかもしれない……」

明石「だろうな」

秋月「そもそも、どうやって接触するんですか？ なにかアテはあるんですか？」

明石「全然」

秋月「やっぱり、あなた、干されるだけの理由が、なんかある人ですよ……」

明石 「なに、心配するな。ここに着いたとたん街の娘に励まされた。なんとかなる」

秋月 「しつこいようですが、高等警察にだけは本当に気をつけてくださいよ」

明石 「うんうん」

明石、無造作にカネをかき集めてコートのポケットにバサバサ入れる。

舗道。

明石、通りすがりの男を呼び止める。

明石 「あのう」

男 「……」

明石 「帝政ロシアに反抗している地下組織の首領の名前をご存じありませんか？」

男、逃げてゆく。

明石 「ケッ、肝っ玉の小さい」

高等警察本部、署長室。

ザーノフ 「日本公使館のモトジロウ・アカシ」

トルージン 「役にたたんから日本公使館を放り出された男だろ。そいつがどうした？」

ザーノフ 「市警の報告によると、その……、路上で市民を捕まえては、反抗組織首領の名前を聞いて回っているとのことですよ……」

トルージン 「かわいそうに、食べ物が合わなかったのだろう」

ザーノフ 「あの男、日本の武官です。よもやスパイ行為を」

トルージン 「馬鹿馬鹿しい。そんなマヌケなスパイが地上に存在するものか」

ザーノフ 「しかし」

トルージン 「もし、その報告が事実だとしてもっ！ それは日本公使館の陽動作戦だっ！ 本命はクリノだ。そのスキに動くっ！ きっと動く。アカシなどほっとけ」

トルージン、怒って立ち上がる。

トルージン 「そんなことより、わたしの護衛はどうしたっ！」

ザーノフ 「はっ！ ではアカシの監視分を署長の警護にあたさせます」

舗道。

明石、初老の夫人を捕まえる。

明石 「あのう」

夫人 「あら、あなたね？ いま街で評判の変な日本人」

明石 「あら？ もう評判になってますか……それはマズいな」

夫人 「そうよ、マズいわよ。前はそんなじゃなかったのに、ロシアの警察が入ってこっちだれが密告するかわからないイヤな街になっちゃっているんだから、あなたも気をつけないと……」

明石 「ありがとうございます」

夫人 「でも偉いわ……こんなに小さい人なのに、あの皇帝と戦うなんて」

明石 「ファンタジーじゃないんです。それにぼくはもう大人です」

夫人 「そうね、ごめんなさい」

明石 「知りませんか？ 地下組織の」

夫人 「もし知ってる人がいたとしても言えませんよ……怖いもの……」

明石 「そうでしょうね」

夫人 「だから、でしょうね……ここがこんな風になったのは。カストレンも大変だわ」

明石 「なんですって？」

夫人 「さようなら、勇気ある島の人」

明石 （……。カストレン……）

路脇。

角を曲がる夫人。

イリューシャ、夫人に紙幣をわたす。

夫人「いないわ。眼をみればわかります。とってもいい御仁ですよ」

イリューシャ「……」

夫人「あなたも、ね」

イリューシャ「……」

夫人「ごめんなさい、おせっかいな言葉ね。……どこのお嬢さんか知らないけれど、こんな物陰で頼まれなくても、あの人なら、わたし自分から教えてあげたでしょう」

夫人、微笑みかける。

夫人「こういう形でお金を使って人に言付けを頼むのは、はしたないことよ。幸せになる道を探しなさい、さようなら」

イリューシャ、両手を口にあてて暖めてみる。

ホテル・ニーヴァ。

秋月 「カストレン？ ……どっかで聞いた名前だな……かすとれん、糟取れん」

明石 「フィンランド憲法党の長老だ。フィンランドから消えたと思っていたら、こんなところにいたんだ」

秋月 「祖国が陥落したあと、このストックホルムの地下に潜んで、反撃の機会を待っていた、か。なある、ありえますね」

明石 「近々、会いに行く」

秋月 「はあっ？ どうやって？」

明石 「ぼくぁ、もう充分コナ蒔いたよ。むこうが本気なら、そろそろ顔を出していいころだ。それが互いの礼儀というものだろう。これで無視されたら運がなかったと思って諦めるしかない」

秋月 「……」

明石 「どうした？」

秋月 「いや驚いたなあ、あなた一人前に地下組織の大ボスをテストしてる」

明石 「対等にやってくれる奴しかアテにならん。アタリマエのコトだ」

舗道、白夜。

明石、ぶらぶら歩いている。

後ろから馬車が追いついてきて平行に進む。

明石、立ち止まる。

馬車、止まる。

窓ごしに、車内の壮年の紳士と眼が合う。

紳士「あなたのやってることは、不快を訴えて泣き叫ぶ赤子も同然だ。その大きな声が、結局は狼を引き寄せてしまう」

明石「……。見過せない、のは、地下組織の面々でしょうね」

紳士「ええ。大変、迷惑です」

車内の暗がり、紳士の握るピストルが見える。

走る馬車、車内。

明石、目隠しをされて座っている。

紳士 「これがもし、ロシア高等警察の罠だとしたら、あなたはどうしますか？」

明石 「カストレンとわたしの目的は同じです。もし、カストレンが本気で帝政ロシアと戦うなら、……またその力があるなら、わたしがロシア高等警察の罠に落ちることはないはずだ」

紳士 「……」

架橋

イリューシャ、フードをかぶり、雪の中、架橋の上から凍った河を見下ろして立っている。

背後の路上を馬車が走り抜ける。

イリューシャ、振り向かない。遠ざかる馬蹄の音を耳で追っている。

ラコスキー、街灯の暗がりからイリューシャに駆け寄る。

イリューシャ、頷く。

ラコスキー、馬車を追って暗がりには走り去る。

貧民窟、狭い路地。

明石と紳士、ロバの絵の掛かった酒屋の表に立っている。

紳士、中に入る。

明石、続く。

ふたり、階段をのぼる。

ドアがある。

開けて入る。

表通り路上

イリューシャ、ガス灯の照射からそれて、暗がりにも身を没する。

室内。

明石、立っている。暖炉のある広い部屋。

暖炉の側にある椅子に温厚な微笑を浮かべた老人がいる。

老人 「どうぞ、おかけください。わたしが、カストレンです」

明石 「明石元二郎です」

老人 「ええ、わたしは、あなたのことをとてもよく知っています」

下町巷、路上。

ラコスキー、寒いのか足踏みしている。

歩道の並び、ガス灯の照射の外、闇の中から、ふいにイリューシャ、現れる。

ラコスキー 「……」

イリューシャ、フードをうしろに跳ね上げ、金色の長い髪を振り出して雪をはらう。ラコスキーを見る。

ラコスキー 「……。見失いました」

イリューシャ、小首を傾ける。無機質な表情。

ラコスキー 「この先は、貧民窟です！ ロシア人は生きて出れませんっ！すみませんっ！」

イリューシャ、コートを脱いで、ラコスキーに渡す。

イリューシャ 「ついてこないで」

イリューシャ、狭く入り組んだ舗道を歩き始める。

雪が激しい。

イリューシャ、髪の毛を両手でくしゃくしゃにする。

ブラウスのボタンを引きちぎる。

貧民窟。

舗装されていない泥道。両側に圧迫する高い壁。
全力疾走し、またたく間に方向感覚を失うイリューシャ。
暗がりに潜み、意外に数の多い浮浪者たち。逃げ場を塞ぐように近づいてくる。

イリューシャ、息が切れて倒れる。
狭い路地の底に両手をつき、粗く、深く息を吸うイリューシャ。
イリューシャ、怯えきっていることを自覚しながら、なぜか笑えてくる。

××××

狭い路地。
転がった母親に押し出される幼女、
幼女、這逃げる。
追って来るロシア兵、
背後の喧争、市民の暴動、鎮圧にかかる軍隊の銃声。
幼女、息が粗くなる。
追って来るロシア兵、
幼女、暗がりにしゃがみ込んで震える「……メ・ネ… ポイス」

××××

貧民窟。浮浪者に取り囲まれるイリューシャ。
イリューシャ 胸元を押さえて立ち上がる「・・リカ！メネポス！」
急に袖を引っ張られる。
こぎたない老婆、前歯がみんな抜けてる。

老婆 「追われてるね？」
イリューシャ 「……。高等警察に……」
老婆 「だめだ。悪いが、かばってやれない」
イリューシャ 「わかってる。だいじょうぶ」

行こうとするイリューシャの袖を掴んでいる老婆、表情が迷っている。

老婆 「待ちな。あんた……フィンランド人だろ」

イリューシャ、目が泳ぐ。
乾いた風の音。

シベリア・夏。

乾いた風の音。

ツンドラの枯れた大木に吊されている幾つかの腐った肉塊。

制服を着た一団が視察に現れる。

制服を着た太った女、棒杖でその唯一の生き残りのあごを上げてみる。

呼吸する肉塊、虚ろな目を向ける。

イリューシャ・グランセリウス、9才。

イリューシャ「わたしは、死を恐れませんが。わたしは、皇帝陛下の御心によって生き、御意のままに死ぬものです……わたしは、死を恐れませんが、わたしは、皇帝陛下の御心によって生き、御意のままに死ぬものです……」

太った女、満足気にうなづく。

教官「下ろせ」

シベリア・冬。

猛吹雪。

地図とコンパスを持ってさまようイリューシャ・グランセリウス。

断崖。

複雑なロープワークを駆使して垂直壁を登りきる。頂きの小屋の根元に爆弾を装着し、口に咥えた導火線に火をつける。

導火線の火の明かり照らし出される、イリューシャ・グランセリウス10才。

牢獄。

制服を着た太った女とテーブルごしに差向うイリューシャ。

イリューシャ 「そして、わたしは針金で赤ん坊の首を絞めました」

太った女、イリューシャの頬を棒杖で殴る。勢い転がるイリューシャ。

教官 「まばたきしながら喋るなっ！会話とは演技だ！そんな演技では尋問官にウソが見抜かれる。正体が見破られたら、おまえは壊されるっ！壊されたら任務は失敗だ」

教官 「皇帝陛下のみが神だ。人間は非道の生き物だ。皇帝陛下に従わない非道の人間どもに捕まったとき、なにをされるか、いま教えてやる。ここに手をだせ」

男たち、イリューシャの小さな手を押さえつけ机の上に広げる。

太った女、イリューシャの人差指の爪の間に釘を突き刺す。ハンマーで打ち込む。

髪をつかんで、イリューシャの顔を上げさせる。

教官 「馬鹿者っ！訓練を受けていない普通の女は、拷問にかけられたら泣き叫ぶものだっ！泣けっ！喚けっ！許しを乞え！」

イリューシャ、泣き喚く、絶叫する。

太った女、イリューシャの中指の爪をペンチではぎ取る。

教官 「この程度の拷問など恐れるに値しない。苦痛の限界にあることを全身で表現し、すべてを自白しきったと敵に思わせるのだっ！ ここにあるのは姿のない苦痛だけだ。爪根が傷つかないかぎり、爪はまた再生されることをおまえは知っている。また働けるようになる。皇帝陛下の為に何度でも働けるようになるのだ」

原林。

兵士の背後に忍び寄るイリューシャ。猫のようなしなやかさ。後ろから兵士の首に針金を引っかける。適度にあがく兵士。

教官 「絞め殺せ」

兵士、教官もイリューシャも本気と悟って、死にもの狂いで暴れる。
イリューシャ、締め殺す。

教官 「よし、食堂にいったいい」

ペテルブルグ皇帝宮。

宮廷貴族の集う壮麗な宮廷広間。

飾り椅子を配した円柱のかたわらに立つ、イリューシャ・グランセリウス。

12才。白い陶磁器のような肌、ガラスの碧眼、金色の髪、人形のように美しい。

侯爵夫人「まあ、可愛いお姫様、お名前は？」

イリューシャ「トゥマーン」

侯爵夫人「霧？ ま、ほほほ、おもしろいお嬢チャマね」

イリューシャ、ニッコリ微笑む。その表情、まるで天使。

侯爵夫人「皇女をごらんなさい？ 趣味の悪いお洋服でちゅねえ、おっかちいでちゅねえ」

侯爵「よさないか」

侯爵夫人「いいのよ。皇帝一族は底抜けに鈍感な連中なんだもの。お嬢ちゃんにも、パリの香水をかけてあげるわねえ、ねえ、いい匂いでちゅねえ」

侯爵「そんなものここで出すな」

侯爵夫人「ペテルブルグなんてしょせんヨーロッパのすみっこにある田舎なのよ。ねえ？ お嬢ちゃんもそう思うわよねえ？」

イリューシャ、こっくりと愛らしくうなづく。

帝都皇室。

皇帝、ひざ掛けの上に置いた化粧箱から菓子のひとつとって、イリューシャに与える。

皇帝、もうひとつとって、自分の口に入れる。イリューシャを見て促す。

イリューシャ、皇帝に倣って菓子を口に入れる。

皇帝、微笑み、イリューシャ、その表情に倣う

貧民窟。

イリューシャ・グランセリウス、ふあつ、と目をひらく。

イリューシャ「そう。わたしはスオミで生まれたの。ずっと前にこっちへ逃げてきて、……私、署長たちの出入りする店で働いているんだけど、それで..」

老婆「高等警察がなにか仕出かそってのかい」

イリューシャ「そのことでカストレンに知らせたいことがあるの。連絡とれる？」

老婆「……」

イリューシャ「日本人と会ってるからどうか。急いでるの」

老婆「……。いつもの店だよ」

イリューシャ「わたしひとりじゃ信用されない、一緒に来て」

イリューシャ、老婆にピストルを渡す。

イリューシャ「取ってきたの。おばあさんが持ってて」

老婆「わかった」

老婆、帯の背中にピストルを差込み、足早く歩きだす。

酒屋二階。

明石 「ちょっと、待った。待った、待った、待ってくださいっ。あなたがた、とんでもないハナシをしてませんか？」

紳士 「……」

明石 「非常識だっ、専制主義国家を議会政治に戻すどころじゃないっ、それじゃあ、まるで……まるで……」

老人 「革命だ」

明石 「か、革命？ ……」

明石、呆然とする

明石 「……ロシア、革命……」

明石 「そんなコトはロシア国内の問題でしょう？ ここでどうしようというのです？」

紳士 「ロシアの圧制を呪う組織があるのは、周辺国なのです。革命の導火線も周辺諸国にある」

老人 「ロシアが日本と戦争を始めた今が絶好の機会なのだ。無理な対外戦争でロシア国内にも不満が充満している。われわれは、それを扇動する」

明石 「あおる？」

明石、紳士と老人の顔を交互にみる。

明石 「ここに、地下組織の党首が、ふたり……」

紳士 「ロシア国内に革命運動が野火のように広がれば、皇帝は戦争どころではなくなります。日本が救われるにはそれしか道はない」

明石 「……。そして、ここに、運動資金 ……」

明石、テーブルの上に札束を投げ出す。

酒屋、表。

イリューシャ、入口のロバの絵をみる。

老婆とふたり、中に入る。

階段を登る。

老婆の背後、イリューシャの眼が冷めてくる。

老婆、2階のドアを開ける。

2階。

ドアが、開く。
室内に男が3人。

イリューシャ 「……」

ドアのそばにいたひとりの男が、ドアを閉める。

老婆 「露探だよ」

老婆、ピストルを奥の男に投げ渡す。
ドアのそばの男が、イリューシャの背後に立つ。
三人目の男が、ナイフを持ってイリューシャに近づいてくる。
イリューシャ、ふいっとわらってしまう。

イリューシャ 「そんな馬鹿じゃない、か」
正面の男 「無駄足だったな」

鋭いナイフのエッジが、イリューシャの頬に触る。

走る馬車、車内。

紳士 「『ロシアの霧』です」

明石 「？」

紳士 「ペテルブルグ宮廷専属の暗躍者なのですが、このストックホルムに入ったという報告がありましてね。気を付けてください。あなた、つけ狙われてますよ」

明石 「殺し屋？」

紳士 「なんだってします。『ロシアの霧』にくらべたら、高等警察など日向の猫だ」

明石 「どんな奴なんです？」

紳士 「わかりません。見たが最後です」

明石 「……」

酒屋二階。

テーブルを潰して転がる男。

奪ったナイフを片手に旋回するイリューシャ、ナイフの先端が、背後の男の眼球を切断する。

床に転がったピストルに手を伸ばす男、

イリューシャ、すばやくナイフを逆手に持ち変える、

男のてのひらを串刺しにして床に打ち止める。

男たち、老婆、全員が目を切られている。

イリューシャ 「日本陸軍駐在武官モト・アカシが、ここで反逆者カストレンと会っていたと証言する？」

男 「……。しっ、知らんっ！」

イリューシャ 「そう、残念ね」

河畔

明石、河畔に突っ立って、ぼんやりと凍った河を眺めている。

小石を拾って投げる。

小石、氷の上を跳ねる。

明石、もうすこし大きな石を拾って投げる。

氷が割れる。

明石、……振り返る。

イリューシャが立っている。

明石 「おや、あなたは……」

イリューシャ、微笑んで小首を傾けるような、うなずき方をする。

イリューシャ 「……。どうして石を？」

明石 「は？」

イリューシャ 「なぜ、かな、って、……凍った河の氷を割って楽しいですか？」

明石 「え？ いいい、いや、その、なんとなく……考え事をしていたものでして ……なぜ、でしょうか……」

イリューシャ、微笑んで、ほうっ、と両手を暖める。

イリューシャ 「お国のことが心配でしょうね、……残してきた家族のことや、野や山や、一族のお墓や……木と紙でできたお家のことや……」

明石 「……」

イリューシャ 「……」

明石 「冬は……」

イリューシャ 「なに？」

明石 「……終るものです」

イリューシャ 「……。……氷がわれたから？」

明石 「割るんですよ」

イリューシャ 「……」

イリューシャ、ゆっくり微笑んで、また、ほうっ、と両手を暖めてみる。

ホテル・ニーヴァ

明石の机上。

末の弟の手紙、「第九師団ニ配属賜り、……」
に、最新の戦況報告書が重なっている。

報告書、

「第一師団・第九師団・第十一師団
旅順総攻撃・旅順陥落セズ・損害甚大
死傷者一万五千兵以上・機密・公表ヲ禁ズ」

在ストックホルム日本公使館。栗野執務室。

執務机に公使栗野。

その前に、明石。

明石 「ロンドンの宇都宮さんに電信打ってもらえませんかね」

栗野 「どんな？」

明石 「ロシアに革命の兆しアリ」

栗野 「ナイだろ」卓上の茶碗を触り温度を確かめている。

明石 「いや！ アリます」

栗野 「あるにはあるのだろうが、運動としては、まだ小さい」

明石 「だから、ソコを大々的にセンセーショナルに、もう今日にも明日にも、ロシア全土に革命の炎が上がって、ペテルブルグ宮廷は、いつなんどき暴徒に夜襲されるかわかったものではない。てなガセ報道をロンドンから世界に向かって発信してもらいたいんです」

栗野 「面倒だな」

栗野、茶碗が熱かったのか、指を引っ込める。熱すぎる茶に不機嫌になる。当番は誰か、こんな茶の煎れかたは言語道断。てなシブい顔。

明石 「いいですか？ イギリスのロイター通信と言えば、世界最大の報道機関だ。ロイターが正義と言えば正義、悪と言えば悪。事実と言えば、なんだって事実になるんです」

栗野 「それは誤報をしないからだろう」

明石 「誤報はすでにしてますよ。日本が快進撃してるなんてとんでもないウソだ。大日本帝国が可憐なよい子の国だというのも誤報だ。誤報というより情報操作だ。でも、そのおかげで日本は世界から信用され、カネも貸してもらえて戦争ができてる。事実が報道に引きずられてるんです」

栗野 「極論だな。報道より世間を見ろ」

栗野、椅子の背もたれに体重をかけ、窓の外を見る。茶が冷めるのを待つ風情。

明石 「知ってますか？ 日本の参謀本部もロシア軍もロイター通信の情報をもとに作戦を立てている。ペテルブルグ宮廷の貴族連中だって、世界の状況はロイターから吸収してるんです。軍のスパイうんぬんと民間の報道機関、考えてくださいよ、どっちが人数も多くて、気軽に情報を採りやすいと思いますか？ まじめに考えて」

栗野 「それで？ それが、この戦争と、どういう、関係が、あるのかね」

栗野、茶碗の蓋をそっとあげて、茶柱が立ってるや否やをよく確かめてから、優雅にする。

明石 「……かつてないことです。かつてないことですが、かつてない卑劣な戦略でロシアを攻撃できます」

栗野 「大袈裟に言うことはない。おばはんの井戸端会議で村八分にしようというのだろう？ 世界に冠たる大ロシアの皇室を」

明石 「そう！ それ！ それです！」

栗野 「下劣」

栗野、茶を一服し、年代物のテーブルに気を使い、仏語の並んだ報告書の一枚を取って茶碗の下に敷く。

栗野 「土道に忤るふるまいだ」

栗野、のどの潤いを愉しむかのよう。

明石 「富を掠めるなら貿易、……リョーマが衝いた通りだ。そして操作するなら報道……。公使！ 5年前から、20世紀になったんですよ。ご存知なかったんですか？」

栗野、黙って前かがみになる。冷静なようであり、異常な速度で立ち上がる。

栗野 「知っちょーわ！」顔を真っ赤にして怒っている。机を叩く。

栗野 「維新を作ったのはわしらじゃけん。おまえら洩垂れ小僧が」

明石、食う。

明石 「そのご自慢の維新！ 公使は純真一路、汚いことはなにひとつなくやり遂げたんですね！」

栗野が叩いた弾みで転んだスロバキア製の地厚な陶器の湯呑が欧州骨董執務機の縁をめざしてころころ転がってゆく。

栗野 「……」

明石 「あんたあ！」

明石、姿勢も変えない。平静な風にゆったりつつ立ったまま、そのまま怒鳴っている。

明石 「呆けたとではナカトですか？」

栗野、ニガイ顔。

極東。列島。西日本。北九州。ハカタ言葉とフクオカ言葉は近在でも異なる。実にふたりは同郷。

栗野 「外国の大物にも、それだけの大口を利く度胸が、あるかキサン」

明石 「誰相手でも、態度を変えたことはないですよ。知ってるでしょう」

栗野 「口八丁で真剣勝負か、なさけなか」

明石 「カタナよりは有効なものだと悟りました」

栗野、縁から落ちそうな湯のみを掴む。

明石 「自分は、戦争をしとります。ガイコクと戦争してるんです」

栗野 「宇都宮君にそれを頼むと、どうなるのかね」 椅子に座る

明石 「ロシアの民衆も自分たちの不満が世界に通用するイラダチだという事を自覚するでしょう。反逆行為に自信も持つでしょう。その自信が、事実革命を引き起こす弾みになるかもしれません。ロシア皇帝は、逆に恐怖にかられます。貴族たちもです。気ぜらしの対外戦争どころではなくなる」

栗野 「それで、極東にいるロシア軍の進行が止まる、とでも言うのか」

栗野、湯呑をきちんと自分の正面に置く。

明石 「そこまでは、なんとも言えません。でも……戦争は、始めるより終らせることの方が難しい。この戦争、もうこの辺でやめようとおもえる状況でなんですか？」

栗野、置いた湯呑を觀賞している。

明石 「日本軍が、地球の半分以上もある広いユーラシア大陸をどこまでも、攻めあがり、シベリアを越えて進撃し、露都ペテルブルグを焼き尽くすまでやりますか？」

栗野、湯呑をちょっと動かし、机にかかる針葉樹の陰に埋めて眺め直す。

明石 「できるわけない」

栗野、気にいらなかったように、陶器を木立ちの陽と影の狭間に置き直している。

明石 「それよりも、日本の国民が半分も死んで、日本本土が占領される方が先でしょう。そこまでやったらロシア皇帝も陛下も満足するでしょう。……ソレ、ほんとにソレでいいんですか？」

栗野 「……」 机の引き出しから、金属工具を取り出す。レンチ。

明石 「そこへ行き着く前に、皇帝に、ここでやめようと思わせる状況を作らないといけないんじゃないですか？」

栗野 「根拠のない煽りだけで、革命が起きると、本気で思うのかね」

明石 「根拠はあります。ロシアは、叩けばホコリが出る国です。叩くものにも、あっちこっちもうホコリだらけでホコリが国になっているようなものだ。ちょっと火花を飛ばせば、あっという間に燃え広がる。必要なのは、砲弾じゃない。言葉なんです」

栗野、六角ネジを締めるレンチで湯呑を割る。

学者のように、破片を見分けている。

栗野 「……。ロンドンが、うんというとはかぎらんぞ」

栗野、木陰が陰影を作る机の上に、なにごとを創作しているのか、破片を丁寧に配置している。

明石 「栗野さん……」

栗野、陶器破片の配置された枯山水風の卓上を見下ろしている。

栗野 「わかった」

栗野、頷くと、破片を片付け、今しがたまで見下ろしていた光景をパッとゴミ箱に捨てる。

栗野 「やってみよう。非常識だが、おもしろい。わりと論理的だしな」

在ストックホルムアメリカ大使館。

各国の大使、夫人が社交会を開いている。

栗野公使、燕尾服で入ってくる。

壁際にいたトルージン、栗野公使の前に立つ。

トルージン 「ドープルウィ、公使クリノ。勝ち目のない戦争だと気づいて、停戦仲介をしてくれる国を探しに来たのかな？」

栗野 「ヴェーチェル。それも正当な外交任務ですよ、署長」

トルージン 「正当。正当とはよいことだ。貴君とは敵対国の人間だが、互いにルールを踏み越えなければ、こうして機嫌よく話し合うこともできる」

栗野 「高等警察が国際法に則った正しい逮捕権を理解されておることを切に願いますな」

栗野、挑発的な眼でデオルキンを見る。

トルージン 「ハラショー、クリノ。東洋のサルにスパイゲームは向かない事をはっきりと思い知らせてやる」

栗野 「バジャールスタ」

窓際に明石と秋月。

秋月 「堂々としたものです。栗野公使」

明石 「日本は、あいつらサムライが自分で自分らの支配権を捨てて革命をした。だから今でも上から民衆をみてる、その態度が抜けないんだ」

秋月 「毅然としていいじゃないですか。節度もあって、欧州の騎士階級に通じるものがある。サムライは、好評ですよ」

明石 「ずっとサムライならいいかもしれん。だが、ああいう態度だけは、代々下の者にも伝染する。日本の官僚はこの先ろくなものにならんだろうよ」

秋月、揺らせていたグラスをしみじみ見る。

秋月 「国と国が利害を競って、戦いつづけている限り…。敵国というものが、敵の目があるかぎり、国家の方策を国民にも知らせたり相談したりすることはできません。一部エリートが国策を独占し懸念し構想し、真実ではない理由を国民に喧伝して国を引っ張る他ないじゃないですか」

明石、手に持っていたシャンパングラスを手近なテーブルに置く。

明石 「君は若い。そのエリートだ。だからそんな無理なことが当たり前だと信じれるんだな」

秋月 「道理ですよ」

明石、自分のグラスと他人のグラスの位置を勝手に動かしている。

明石 「……。たとえば、通信をだよ」

明石、グラスの配列をあれこれ調整して、心地いい光景を探っている。

明石 「一部団体やら国家やらから切り離すことができれば、その道理は無理になるだろうな」

秋月 「明石さんは夢想家ですな」 笑う。

明石、会心の作が出来ましたな如く、グラスの並んだテーブルを眺める。
給仕が、グラスを片付ける。

明石 「北欧貴夫人とお近づきになれるのかのお。金髪碧眼、でへは」

秋月 「その為にここへ連れて行って言ったンですかあ？」

明石 「ぼかぁ、スパイだよ。スパイに美女はつきものだろうに」

秋月 「サムライ日本は礼儀正しいいい子の集まりなんですからね。停戦交渉のいい仲介国を得るには、各国大使にいい心証を与えなくてはならない。くれぐれもバカしないでくださいよ」

明石 「言われて、ハイそうですかと聞くとするか俺が」

明石、宴遊会場をぶらぶら歩き出す。酔っぱらっていて妙に機嫌がいい。

大きな丸い中華テーブルを囲む列強諸外国の外交官、武官がいる。

英・仏・外交官が座って談笑し、独・露・武官が、立ち話ししている。

明石、テーブルに近づきテーブルの食べ物物を物色する。

英外交官 「(諸君、となりの小さなテーブルから新しいお客さんだ)」

一同、明石を見る。

イギリス 「(ようこそ、我々の中華テーブルへ)」

明石 「あはいあはい」 輪に押し入り料理に手を出す。

仏外交官 「(本当にどこにでも突っ込んでくるんだな)」 明石に微笑む

露武官 「(機関砲の前に整列したままぞろぞろやってくる。知能のなさ、空恐ろしいくらいでね)」 笑う

独武官 「(あなたは、ドイツ語かフランス語ができますか?)」

明石 「あはいあはい」 前歯を出してニヤニヤ笑い。

露武官 「(ほっとけ、わかってない)」

イギリス 「(さて諸君。このように彼らは、このテーブルに分け入ってきたわけだが)」

フランス 「(堂々、清国を戦争で打ち負かして、だね?)」

英外交官のかたわらに英国貴婦人。チャイナドレスを着ている。

貴婦人 「(黙って見過すつもり?)」

イギリス 「(彼らは、戦争に勝利したのだから、領土を受け取るのは、当然の権利だろう)」

一同、明石が中華料理を取るのを眺める。

ロシア 「(それは人間同士の約束事だ)」

フランス 「(ご婦人に)」明石の取った皿を貴婦人に渡すように手で示す。

明石、わからなげに首をかしげる。

ロシア 「(だれか、社交ルールを教えてやってくれないかね)」

露武官、料理を手盛りした明石から皿を取り上げ貴婦人に渡す。

明石 「あはいあはい」 チャイナドレスの美女に微笑みかける。

仏外交官、貴婦人が受け取った皿から料理を取り、皿を独武官に回す。

ドイツ 「(ここは、我々に入用なのだ)」笑いながら、料理を取り、露武官に回す。

露武官、料理をさらい、空になった皿を明石に返す。

明石 「あはいあはい」 空の皿に料理を盛ろうとする。

露武官、巨体で明石を押し出す。視線は、独武官を牽制している。

明石、さすがにむっとする。

フランス 冷笑 「(君たちは必死ダネ)」

露・独・武官、英仏を睨む。

ドイツ 「(君らは、早くからこのテーブルに着いていたから、さぞかし満腹だろうが)」

ロシア 「(我々だって、まだたいして食っとらんぞ!)」

貴婦人 「(なんだか怖いわ)」

フランス 「(マダム心配には及びません、私がついています。ドイツ人よイタリア人よロシア人よ、そこのサルよ、乱暴はよしたまえ)」

ドイツ 「(それだ。すこし出遅れて来ただけで、ことあるごとに我々のことを餓えた狼のごとく、言いふらすのは、得心いかないな)」

ロシア 「(そうとも。君らがさんざんやってきたことではないか)」

イギリス 「(粘着はよしましょう)」

イギリス 「(我々は紳士だし、もう20世紀になったのです)」

英外交官、ナプキンで口元をぬぐう。

ロシア 「(フランスはわがロシアと同盟関係にある。いつからイギリス寄

りにかわったのだ？ イギリスは、このサルなどと組みしおったのに)」明石を指差す。

フランス「(友よ。ロシアが極東に注力して欧州を空にしている今、私としてもイギリスに向かって強きに出るわけにはいかないではないか)」

イギリス「(このままロシア軍が敗退してくれると、私には好都合ですな) 仏大使に酒を注ぐ。

フランス「(私はね、ロシアの軍事力を頼りに同盟を組んだのに、その肝心の軍が極東で猿などを相手にやり込められ続けられては困るのですよ。私の仇敵は、あくまでもアナタなのだから)」英外交官に返杯し微笑む。

ロシア「(陰謀だ。我々は、勝っている!)」

フランス「(なあ友よ。猿の島などどうでもよいではないか。君らがあまり小突き回すから、彼らは発狂したのではないのかね)」

ロシア「(それも誤解だ。我々は、猿の島などに関心はない。我々が握っておきたいのは極東。中国、朝鮮の一部にすぎん)」

フランス「(そいつに聞いてみてはどうか?)」明石を指差す「(日本はな、防衛戦争のつもりでいる。侵略者から自国を守っていると思っている。彼らには、正義の戦争を行なっているという強い意思がある)」

ロシア「(猿どもに、そう信じ込ませた奴がいるのだ)」英外交官を睨む。

フランス「(ロシアにその意図がないとしても。ロシア軍が朝鮮半島に居座れば、小さな海を挟んで向かい合わせだ。日本人でなくとも、侵略を警戒するだろう)」

イギリス「(ロシア軍が、朝鮮から進軍を始めれば、猿は自分の島で防衛戦をしなくてはならなくなる。戦略的に言って、そうってからでは、日本本土の防衛は絶対に不可能だ)」

フランス「(だから、そうなる前に満州で戦うことにしたのだろう)」

貴婦人「(迷惑ですわ)」

ドイツ「(仕向けた、のだろう?)」英大使を斜に見る。

英外交官「(レトリックも対話のひとつですよ。彼らがどう解釈したかは知らないが)」

貴婦人「(こんな話、私はもううんざり)」

フランス「(そうですな。マダム、踊りましょう)」

チャイナドレスの貴婦人、仏外交官の手をいなして、テーブルを離れる。

英外交官、指を弾く。

米大使館付きの若いアメリカ人給仕長、皿を片付ける。

アメリカ給仕長、厨房へさがり、料理人たちを叱咤し、取りまとめ、新しい料理をふんだんに用意する。フロアに戻って来て、全体の様子を眺める。

控えめに宴席を運営している者独特の機敏さと余裕があり、今は、その举措が、慎ましい。

仏外交官、貴婦人にあしらわれて、席に戻ってくる。

フランス 「(正直、潮時ではないかと思っているのだが)」

イギリス 「(調停役を買ってでられますか？うーん、それは見合わせてもらいたいな)」

フランス 「(アナタは、露日戦争が早期に終わって、ロシア軍が欧州に戻って欲しくないからそう言うのでしょうか)」

イギリス 「(そうですね。舞い戻られては困る。誤解がないように言っておきますが、イギリスが日本に肩入れするのは、日本単独ではとうていロシア軍と戦えないからだ。私は、露日、双方に共倒れしていただきたいのだ。皇帝ロシア軍は欧州の安全にとって、実に脅威だし、アジアに雄があってもらっても不都合だ。そこはみなさん同意見だと思いますがね)」 仏・独を見る。

露武官、酔っ払って目が据わってくる。

ロシア 「(猿を駆逐して、我々は大軍のまま欧州に舞い戻る！)」

イギリス 「(なにか作戦がおありのようですね？)」

ロシア 「(なぜ、教えねばならんのだ？)」

イギリス 「(阻止不能で確実な計画なら隠し立てする必要はない。むしろ喧伝された方が、より優位に事を運べますよ。自信がおありなのでしょう。で、いつ？)」

ロシア 「(この冬だ。猿どもは、冬に軍隊は動けないと信じている。冬こそロシア軍の本領だ)」

ドイツ 「(細部ではなく、全体の運動としても、日本軍は突出しすぎている。補給の機構というものが無い。側面を衝けば一撃だろう)」

露、明石の開いたわき腹をしげしげ眺める。

ロシア 「(それだけの兵力輸送は完了した。奉天で日本陸軍に対する包囲殲滅戦を行ない、猿どもを屠殺する)」

フランス 「(言い切ったね)」

ドイツ 「(ロシアと日本は、大陸満州で陸戦をしている。ロシアは陸続きだが、日本が自分の陸軍を支えるには、本土から海を渡って武器弾薬食料を運ばなければならない。補給路を確保するには、制海権を守りつづけなければならない。なのにいまだに、旅順は陥落していない)」

フランス 「(旅順？)」フロアの貴婦人たちの踊りに合わせて軽く腰を振り、あくびをかみ殺す。

ドイツ 「(旅順には、ロシア艦隊がある。バルト海から回航されたロシア本国の艦隊と合同すれば、日本海軍の2倍以上の大艦隊になる)」

独武官、テーブルにグラスを置く。そのひとつのグラスの左右にふたつのグラスを置いて挟み撃ちにして見せる。

ドイツ 「(艦隊戦というのは不沈戦艦が備えた大砲の数で決まる。日本海軍に勝ち目は無い)」

ロシア 「(陸海ともども、動員数で圧倒している)」

ドイツ 「(日本海の制海権はロシアが握り、大陸に展開する日本陸軍は、補給路を断たれ孤立し、取り残され、冬の包囲戦で、全滅するだろう)」

フランス 「(それじゃあ、いま調停に入るのは馬鹿げてるな)」 笑って英外交官の肩を叩く。

ロシア 「(調停? とんでもない。そういうものは、戦争をしている国同士にあるものだ。我々は戦争をしているのではない。コイツらを駆除しているのだ)」 明石を指差して微笑む。

明石、ニヤーと笑って応える。

イギリス 「(どうも私までが形勢危しだな)」 仏・独・露を見まわす。

ドイツ 「(イタリアと相談しあってみてはどうだ?)」

一同、どっと笑う。

フランス 「(ルーブル美術館に浮世絵コレクションが増やせそうかね?)」

ロシア 「(猿の曲芸画などいくらでもお譲りする)」

明石 「あはいあはいあはい」 ニヤニヤ笑いながら、その場の全員と握手し、立ち去る。

仏外交官、フィンガーボールで手を洗う。

英外交官、席を立ち、米大使に挨拶しに向かう。

明石、秋月の所にもどってくる。

明石 「いい子にしてたろ」

秋月 「ペコペコにやにやして、なんとも、絵にならない人だなあ」

明石 「エル・ポデルトタール・エッサ・エンセス・マヌス」

秋月 「何語です？」

明石 「ポルトガル語だ」

秋月 「ほう、で、意味は？」

明石、ドアを蹴っ飛ばして、でてゆく。

都邑

明石、夜のストックホルムを黙々と歩く。
表通りから裏路地に入る。

穀倉。

カストレン、シリヤスク、明石、十数人の男たちが集まっている。

明石の目の前で、大きな木箱がこじ開けられる。

木箱の中に銃器。

明石 「ロシア軍の武器じゃないか、よく手に入ったなあ」

紳士 「ロシア軍にも知人はいます。あなたが寄与してくれた現金のうち半分は武器弾薬に化けましたよ」

明石 「あとの半分は？」

紳士 「知人に化けました」

老人 「来月になったら、欧州全土にいる組織幹部を集める。モトを全員に紹介し、一斉蜂起の準備を進める」

明石、カストレンの手を握る。

老人 「われわれの悪魔を葬るのだ」

在ストックホルム日本公使館。

秋月「栗野公使とぼくは、停戦仲介国になってくれる国を探してたんですがね」

明石「最有力候補は？」

秋月「フランス。内々の折衝はついていたのに」

明石「蹴られたろ」

秋月「ええ。……？　でも、どうしてそれを？」

明石「栗野公使、ロシア軍が逆襲にでます。それもこの冬、奉天です」

栗野「……。うわさだ。こんな遠い所から、日本にそんなこと報告しても信じるものかっ！」

明石「フランスが調停から手を引いたのは、その作戦計画をロシアから聞いたからです。日本軍が全滅した後じゃ、だれが中に入っても停戦なんてさせられない。割ってはいるだけバカだ」

秋月「くそ、所詮アジアはヨーロッパに略奪されるためだけにあるのか」

栗野「……」

秋月「万事休す」

明石「この喧嘩、だれも止めてくれないってコトになったらオオゴトですよ」

栗野、振り返り、菅田を見る。

菅田、頷く。

菅田「明石さん。イギリス情報部が、あなたの話に乗りましたよ」

明石「どの話？」

栗野「ロシア革命のハナシだ」

菅田「大英帝国情報部次長オーブリー・ヴォイジーから直接返信がきました。情報網と地下組織のすべてを使って革命扇動することになった。通信は英国で押さえるから、地下組織は……」

明石「わが日本の担当」

菅田「と、いうより明石さん、あなたひとりの担当ということになりますな」

明石「次の会合ですべてが決まる」

栗野「いつだ？」

明石「聞いてしまっただけ後悔しませんか？」

栗野「一蓮托生だ。トルージンのアホに、どっちが猿か教えてやる」

明石、秋月の方をみる。

秋月、栗野をちらっと見て苦笑しながら明石をみる。

菅田「栗野さん。私をロンドンへやってもらえませんか。大英帝国現地で、情報部と明石さんのつなぎになりたい」

栗野 「こんな奴の連絡役でいいんですか？」

菅田 「こんな奴ではありません。今の明石さんは大日本帝国の秘密兵器です。師団一個分に相当する」

栗野 「チャー。鎮台あがりの平民兵が日本を背負ってくか」

明石 「公使、無心が半額残っていたとおもいますが」

栗野 「出す。書記官から残り50万受け取れ」

明石 「ありがとうございます。この金で戦争に勝つ」

栗野 「カネ、カネ、言うな。はしたない」

明石、敬礼して誤魔化す。

栗野 「かわりに調書を書け。帝政ロシア偵察事情。いまは君が一番の事情通だ」

明石 「なんのために？」

栗野 「アメリカでの講和準備をすすめている小村外相に必要なのだ」

明石 「講和？ ロシア帝国は、ぼくが叩き潰します。粉碎してやる」

栗野 「のぼせ上がるな！」

栗野、怒鳴る。

栗野 「勝つことが目的ではない。負けず、停戦させるのだ」

明石 「鎮台あがりの平民兵でも、自分は軍人であります。サムライであります」

栗野 「間違えるなと言っている。土道は他国を粉碎する権利ではない」

王立劇場。

ウィット 「どうなのだ？モターカシは」

イリューシャ 「モト・アカシ、です。」

ウィット 「……皇帝いわく猿の国家だ。猿の名前をわれわれ人間に発音できるものなのかね」

イリューシャ 「そんなふうには考えては、おられないくせに……」

ウィット 「で？」

イリューシャ 「おもしろい男ですわ。自分の身なりに対する美意識が欠落していますね。大物ですよ。地下組織の会合に行くのに、堂々と市民に道順を尋ねたこともあったり。自分が精密なスパイ工作を実行しているのだ、という認識もないかもしれない」

ウィット 「『ロシアの霧』の敵には値しない、か」

イリューシャ 「ちょっとイライラします。もっとマジメになれって手紙を書いて送り付けてやろうか、て何度も思ったくらいです」

ウィット 「きみをイラつかせるとは、たいしたもんだ」

イリューシャ 「それは深読みです」

ウィット 「高等警察に出し抜かれるなよ」

イリューシャ、微笑しながら、ゆっくりうなずく。

地球の眺望

巨大なクの字を描くスカンジナビア半島。スウェーデンから、東へ。
フィンランドを越えてロシア領、ペテルブルグ、ウラル山脈を通過し、
凍った大地シベリアをえんえんと、さらに東へ。
日本海が現れ、右端に小さな弓型をした列島がみえる。
朝鮮半島の根元あたりがクローズアップされる。

荒野。

(テロップ)

『 奉天 』

連射砲撃音。

突撃ラッパ。

蟻のように類類と折り重なり進軍する日本兵。

荒野を覆い隠すほどの死体、手足、砲煙。

馬上、怒号する指揮官。きらめく軍刀。激励、命令、絶叫。

後込みしてきた同胞兵の頭を軍刀で叩き割る。怒号。怒声。

わらわらと壕から這い出る日本兵の群がり。濃い砲煙のなか果敢に前進するも、後方の壕から一斉に射撃した味方別部隊の弾を浴びてバタバタと虫のように倒れる。

北の大地は、見渡すかぎり鉄とベトンで固められたロシア軍の砲台保塁。

装甲壁が、夕日を受けて血の色に染まっている。針を刺したような大砲の群れ。

砲撃閃光。ギューンと砲弾が空気切り裂いて飛来するリアルな音。

群がりあって敗走する日本兵の中で爆発が起きる。火炎。砲弾の金属破片。飛び散る肉塊。

保塁から雪崩をうって行進してくるロシア軍。こだまする「ウラー」の連呼。

大軍大地を覆うさまは動く絨毯を思わせる。

指令部。

参謀 「砲弾がないんです！ 兵はもっと足りない！」

参謀、激して、コンクリートの壁を素手でどんどん叩いている。
血が飛び散ってもやめない。気づいていない。

参謀 「国内の徴兵枠をもっと広げて、もっと兵をどんどん送るよう東京に
言っていただきたい！」

児玉 「会戦を見合わせ、耐えて待つ」

参謀 「なにを待つんですか！ 本国から援軍があるんですか！ 一個二個
の師団が加わったところで、持ちこたえるのは無理です！ そのまえに帝国
陸軍は、陸軍は……全滅する……」

児玉 「そうならん絵を描け、参謀職じゃろが」 出て行く。

荒野

屍の山に沈む夕日。

児玉（師団じゃと？ そんなものどころではない。師団全部、帝国陸軍全部と同量のが働きがいる今すぐいるわい！ アイツあわかつちよるんか！）

児玉、西のはるか遠くを睨みつける。

ヨーロッパ。スウェーデン王国、舗道。

明石とイリューシャ、ゆっくりと歩いている。

明石 「変だね、きみはいつもふいに現れる……なぜ？」

イリューシャ 「……聞かないでください」

明石 「え？ なぜ？」

イリューシャ 「……。なぜ？と聞かれるのは嫌い」

明石 「……」

イリューシャ 「……」

明石 「警告したのに……大本営は、こちらの情報を信用しなかった。……
どうして、もっと……どうして、もっとうまくやれないんだろう」

小雪が降る。

イリューシャ 「また、降り出しましたね」

イリューシャ、明石の正面にまわる。

舗道にひざをつく。

明石 「あ、あ、あの……」

イリューシャ 「馴れてらっしゃらないのね、洋装」

イリューシャ、明石の蝶ネクタイをいったん解き、結び直す。

ズボンの腰回りの裁ちじわを合わせる。

明石 「……スカートが汚れます」

イリューシャ 「かまいません」

明石 「いや、しかし」

イリューシャ 「男のひとは、どんなときでも颯爽としているものです」

イリューシャの手が動く。

しんしんしんと雪がふる。

明石 「……」

イリューシャ 「……」

イリューシャ、立ち上がる。

イリューシャ 「……」

明石、ハンカチを取り出す。イリューシャに渡す。

イリューシャ、スカートのひざをちょっとみる。

微笑む。

明石 「御免」

明石、思わず逃げ出す。

振り返る。

イリューシャ、雪降る舗道に立っている。明石を見る。

明石 「……」

イリューシャ 「……」

明石、一礼して立ち去る。

郵便局。

ラコスキー、窓口に行き、郵便を差し出す。
窓口の男、ハルストレム、郵便物を処理する。
ハルストレム、預かり書を切って、ラコスキーに渡す。
ラコスキー、日付を見る。…2月7日。

サロン、ドロワ・ドゥ・ドメインー 4 F -

ラコスキー 「次の会合は、2月7日」

ラコスキー、預かり書を裏返す。

ラコスキー 「場所は、バリヤーク通りの……」

リュエフ 「待った。こっちの聞いた密告と食い違う。日付は同じだが、場所が違う」

ラコスキー 「なんだって？」

リュエフ 「俺が入手した情報によると、河向こうの教会だ」

ラコスキー 「ドいうこと?!」

リュエフ 「……。どちらかは、罠だ」

イリューシャ 「……」

ラコスキー 「そもそも、あのタヌキ、どうやってあんな地下組織のボスと接触することができたんだろう。高等警察も俺達もかなり必死に首領の行方を探していたんだ。なのに絶対捕まえられなかった」

リュエフ 「一般大衆を味方につけてるんだ、奴は」

ラコスキー 「じゃあ、会合情報を得て踏み込んでも、いつもいつもモヌケのカラなのは、なぜだい？ 市民の情報網だけじゃ、ああも見事に裏はかけない」

リュエフ 「……。高等警察の中にもシンパシストがいるんだ」

イリューシャ、窓から河をみている。

リュエフ 「高等警察内部の人間も、もとを正せば衛星諸国の人間だ。表でヘイコラしてても、ハラの内では違う」

河、碓氷が割れるのが見える。

イリューシャ 「……。それ、逆情報源になる」

トルージン自宅、寝室。

ベッドの上に、震える娼婦と、震える手で銃を構えるトルージン。

ラコスキー 「ホントに、あんたの部下は役にたたんなあ、警備ひとつできなくて、何が警察なんだい？」

ラコスキー、ベッドの上に座り込む。

トルージン 「なんの用だっ」

リュエフ 「今月7日に反抗組織幹部が一堂に会する。場所はバリャーク通りだ」

トルージン 「飲み屋街だな」

リュエフ 「中に入るなよ。遠まきに通りを包囲するだけだ。勘づかれて中止されたらそれまでだ」

ラコスキー、女の脚の臭いを嗅ぐ。

ラコスキー 「それまでになったら、おまえも終わりだ、署長」

某部屋。

老人 「欧州の幹部が集うのだ。踏み込まれたら一巻の終わりだ」

紳士 「トルージンが密かに警戒網を作っています。バリヤーク通り」

老人 「漏れたか。……手配したのは？」

紳士 「ハルストレムです。……。腹心に裏切られるとは思いませんでしたよ」

老人 「そんな事もある……」

紳士 「ハルストレムの処分は、会合が終わってからにします」

老人 「だが、都合がいい。高等警察がバリヤークに掛かりきるうちに、われわれは河向いだな」

舗道。

明石、歩いている。

河沿いの小道。

イリューシャ、もの想いがちに歩いている。
ふと立ち止まり、白夜に光る河を見る。

教会、裏通り。

明石、たむろする浮浪者を装う男たちの間をすり抜け、中に入る。

紳士「会合が終わったら、スイスへいきませんか？ あなたの金を必要としている男がいます」

明石「役に立つ男ならいくらでも出します。ただ、ぼくは礼儀知らずだ。相手に見境なく大口叩くかもしれませんが、拗ねませんか、その男」

紳士「レーニンはそのような狭量な男じゃありませんよ」

明石「聞かない名だな」

紳士「かの大国に革命が起きれば、その指導者の名前を世界は永遠に記憶するでしょう」

明石、コートの中を覗く。

かつて知ってるかぎりの外国語で書いた自分の名前は、こすれてもう読めない。

紳士「日本さえ、あなたの名前は記憶しないでしょう」

明石、一片の雪を掌で受ける。

紳士「あなたが世界に対して仕出かしたこと。あなたが実際にいた、という事実。もね。」

掌の中で消滅する雪。

明石「すべて消える」快活に笑う。

教会、堂内。

参拝人でごった返している。

イリューシャ・グランセリウス、その中をうつむいてゆっくり歩いている。

人垣の向こう、反対側の壁ぎわで紳士と話込んでいる明石が見える。

イリューシャ、すこし考えあぐねるように立ち止まる、歩きだす。

イリューシャの背後、

ローブを被ってうずくまるように椅子に座っていた老婆が、ハッとして顔を上げる。

老婆の両目は、刃物傷でつぶれている。

イリューシャ、老婆に気づかず、地下組織のメンバーが集結した堂内をゆっくり歩いている。

明石、椅子に座る。

同、堂内

イリューシャ、ゆっくり近づいて明石のとなりに座った。

明石 「イリューシャ？」

イリューシャ 「ごめんなさい。ほんとはね、ずっとあなたを監視していたんです」

明石 「組織の命令で？」

イリューシャ、小首を傾ける曖昧なうなづき方をする。

明石 「なんだ、そうだったのかあ、君が遠まきに護衛してくれていたから、ぼくはずっと高等警察に捕まらずにすんでたんだ……」

イリューシャ 「あなたは、この世界に必要な人だから、……」

明石、なんとなく天井の方を見上げる。

明石 「……。よく考えると好運の連続だったよ……ついていたんだ」

イリューシャ 「あなたには、行為にごまかしがない……だから、堂々としてられて……だから……まわりがおびえる……」

明石 「……。正直ではないよ」

イリューシャ 「……。あなたは戦争を実行する人なのね？」

明石 「……」

イリューシャ 「……」

明石 「いや、でも、……」

イリューシャ 「フोटグラフって、ご存じですか？」

明石 「ふおとがら？ 知ってらあ。文明開花の明治ニッポンだぜ」

同、祭壇裏。

目を切られた老婆、紳士の袖を引く。

紳士「ここに？」

老婆「見た者の眼を切って顔を隠したつもりでも匂いまでは消せない。忌まわしき悪魔の娘も今夜で終わりさ」

同、祭壇

祭壇に老人が上がる。

老人「カストレンだ。祖国を略奪しみずからの国家さえ腐敗の淵に沈めた皇帝を滅ぼす時がついに来た。それは、いまここに集結した力によってなされる」

堂内に着席した一同を見渡す。

同、堂内

イリューシャ 「あなたは、カストレンに利用されたとは思っていないのですか？ 彼が第二の皇帝になるかもしれない」

明石 「……。わからない。でも、互いに目的は一致した。東京に、タマネギ頭の天堂が立つことになるなことは絶対にさせられん」

イリューシャ 「日本の王様は、第二の皇帝にならない？」

明石 「……」

イリューシャ 「悪魔の称号は皇帝ひとりのものなのね……」

明石 「……。イリューシャ、きみの目はいつも悲しいんだね」

イリューシャ 「……。皇帝の目もそうだったわ」

明石 「？」

イリューシャ 「……あなたは、おもしろい、とっても変わってる。……わたし……あなたを監視していて、……うん……楽しかったわ、……とっても楽しかった。こんなに楽しかった日々はなかった」

明石 「……」

同、祭壇

老人「裁きを下すにあたって、悪魔の毒牙がどのような姿でわれわれの前に現れるか、われわれは知らねばならない。それは美しく気高い貴婦人に姿をやつすこともある」

カストレン、着席するひとりとひとりに目をやる。

欧州各地の反抗勢力幹部たちを見、明石を見、明石の隣りに座る美しい娘、を見る。

同、堂内

明石 「イリューシャ……」

イリューシャ、祭壇の上のカストレンとまっすぐ眼をあわす。

祭壇の老人 「ひとりで乗り込んでくるとは、まさに人間離れしたクソ度胸だ」

明石 「まさか……イリューシャ……、でも、なぜ？」

イリューシャ、明石を見つめる。

イリューシャ 「聞かないで」

明石 「……なぜ？」

イリューシャ 「なぜ？と聞かれるのは嫌い」

明石 「……」

イリューシャ、立ち上がる。

イリューシャ 「わたしが今日ここに現れたのは、あなたがたに決定的な破局を宣言するためです。わたしは、あなたがたを滅ぼす悪魔の手先。あなたがたは、わたしにあらがえません。カストレン、もはやあなたにはなんの力もない」

祭壇の老人 「そのような空虚な脅迫との決別するために、我々はここに会したのだ」

銃やナイフを構えた男たちが、イリューシャを包囲する。

明石、あわてて立ち上がる。

明石 「待てっ！ ダメだっ！ くそっ！ ふおとがらだっ！ ここに集まった全員が写真に撮られているっ！」

イリューシャ 「大日本帝国明石元二郎大佐。戦時国際法規に則ってあなたを逮捕します。他民族扇動、スパイ工作、反体制組織との謀略」

イリューシャ、凍った河のような瞳で、全員を眺める 「もちろん、ここにいる全員もね」

明石 「イリューシャ……」

イリューシャ 「わたしの勝ちよ。あなたは、わたしを見抜くことさえできなかった」

明石 「きみが……ロシアの……霧、なのか……」

明石、イリューシャを見つめる。

イリューシャ、目をそらす。

海岸……。

(テロップ)

『 バルト海 』

灰色の空。凍結した海。

静止した海の上をぼつりぼつりと歩くイリューシャ・グランセリウスと明石元二郎。

イリューシャ 「この夏、この海、いっぱいにな」

イリューシャ、凍りつきどこまでも広がる海原を見晴るかす。

イリューシャ 「水平線のすみずみまで……巨大な軍艦が群れをなして浮かび……、音も立てずに進んでゆくのを見ました。ひとつひとつに無数の針を刺したような大砲のシルエット、黄色い煙突から黒雲がもうもうと湧き上がっていて、灰色の雨雲と混じりあっていた……。どんだんひろがってゆく巨大な雲が、ひらりひらり、脅すように雷を閃かせて、それが、あまりに美しく、あまりに、恐ろしくて。……わたしは砂の一粒になって、波に巻かれて、そのまま海の底へ落ちて消えてしまいたかったほど……」

明石 「ロシア本国艦隊……すでに日本へ出撃していたのか……」

イリューシャ 「征服した国々からかき集めた人間を満載にして、地球の裏側にある戦場にゆくのです……新たな征服の為に……」

明石、立ち止まって、イリューシャの目を覗き込む。

なにか言おうとして、……なにかに気づく。

明石 「君の……こっちの目？ ……左」

イリューシャ 「わかります？ 見えないのです。幼いときに怪我をして」

イリューシャ、いつもの、小首を傾げる表情で明石を見る。

明石、目をそらす。

明石 「……どうして、ぼくを逃がした？」

イリューシャ 「上司の命令……。わたしは、命令に従うだけです」

明石 「だれだ？」

イリューシャ 「もと帝政ロシア蔵相」

明石 「げえ……。ウィッテ、が……。なぜ？」

イリューシャ 「彼が愛したのはロシアであって皇帝ではないのです」

明石 「……。それで……カストレンたちも逃がしたのか……」

イリューシャ 「革命は民衆の力だけでは成功しません。写真を入手したウィッテは、カストレンの組織を支配できるでしょう」

明石 「ウィッテは、皇帝を……専制主義を見限ったのか……」

イリューシャ「これ以上人民が苦しむ前に、日本との停戦調印を行うには、皇帝にロシアの実態を知らせるしかありません……彼は停戦仲介国にアメリカを選びました。……ウィッテはポーツマスですべてを終らせてくれるでしょう。……モト、生き残って、ロシアに……、……、革命を起こしてください」

明石「しかし、そうなったら……ウィッテも、きみも、……皇帝と運命を共にすることになるぞ」

イリューシャ、……微笑む……。

明石、ポケットからくしゃくしゃになった茶封筒を出して、イリューシャに手渡す。

イリューシャ「……なに？」

明石「大英帝国情報部オーブリー・ヴォイジーとのコンタクトの取り方が書いてある。これを皇帝の為に使うも君自身の為に使うも君の自由だ」

イリューシャ「……自由……」

明石「……逃げるんだ、イリューシャ」

イリューシャ、首をふる……。

明石「……きみに会えて……うん、楽しかったよ……」

明石、歩きだす。

明石「ナケミーン、グランセリウス」 イリューシャ、灰色の海をみる。

イリューシャ（ナケミーン … サヨナラ、モト …）

海洋

(テキスト表示)

『中世の終焉。ユーラシア大陸北西部に起こった産業革命は、その地域の国々を飛躍的に先進化させた。

狩猟、採集、牧畜、農耕など、＜地域自給＞を主体とした人間が生息する為の穏やかな営み、は、＜工業システム＞の獲得によって、変革した。

その変革は、＜類人猿＞が道具を手にしたことで＜人類＞に変貌した瞬間以外には他に比べ得る現象がないほど、極端で、激しい。

例えば、地球の環境データは、その（歴史時間的）瞬間、に、あらゆるグラフが急角度で折れ曲がり、危険な速度で急加速を続けている。

変革を肯定し、以前の生計体系を破壊してしまったからには、もはや、変革以前には、戻れない。人類は、人類の生き方を変えた。

産業文明には呼吸がある。

安い材料に満ち溢れ、安い人材を乗せた広大な土地、集団、を渴望する。

加工した産業製品を売りさばく広大な市場を要求する。

この呼吸を失うと、加工者に過ぎない産業文明は、ただちに窒息死する。

近代＜帝国主義＞は、産業文明が呼吸し続けること、それによって国をして優位たらしめること、を命題として、生まれた。

産業文明によって先進した一部の国々・帝国群が、古代中世的な多数の後進国から各段の優越をなしとげ、産業文明の呼吸が望むままに、掠奪し、地球の大半を手中に収めた。

帝国主義が侵略主義とほぼ同意になるのは、産業文明が持つ呼吸の生理ゆえであり、同じ生理を持つ国家、民族集団間には、必然的に利害摩擦が生じる。もともとは地域間のものだった＜戦争＞が産業文明の呼吸の望む所以によって、地球規模に拡大した。

産業文明の呼吸、がこれを欲するかきり国家政治・ありとあらゆる人間集団、がどう、体制や名称を改めようと、＜帝国＞の呼称・体制をどう改めようと、本質の原理は変わらない。それによって起きる様々な現象、悲喜劇、はなにも変わることはない。

地球規模—国家—からすべての大中小集団—我々の—日常生活の、瑣末な仔細のことごとく、に至るまで。わたしたちは、この非情なゲーム設定の上で、いま、を呼吸し、ここで、生きている。』

アンバサダー・イン、理髪室。

イリューシャ・グランセリウス、金色の長髪をバツサリ切ってもらう。

イリューシャ、鏡の中の自分を見つめる。

（それに重なって、テロップ）

『 ニューヨークピア - 1907年- 』

イリューシャ、立ち上がって、窓辺に立つ。

窓の外に豪華客船が、見える。

トランス・アトランティック、ニューヨーク from to サウスサンプトン。

<ノスタルジア号>。そして、霧笛。

(END)